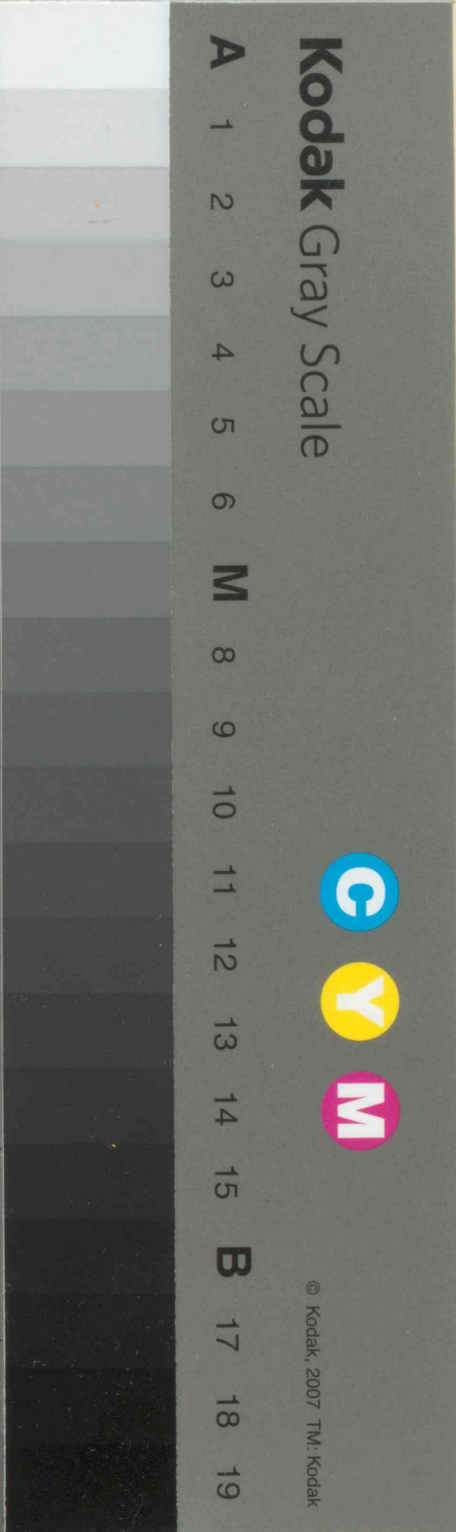
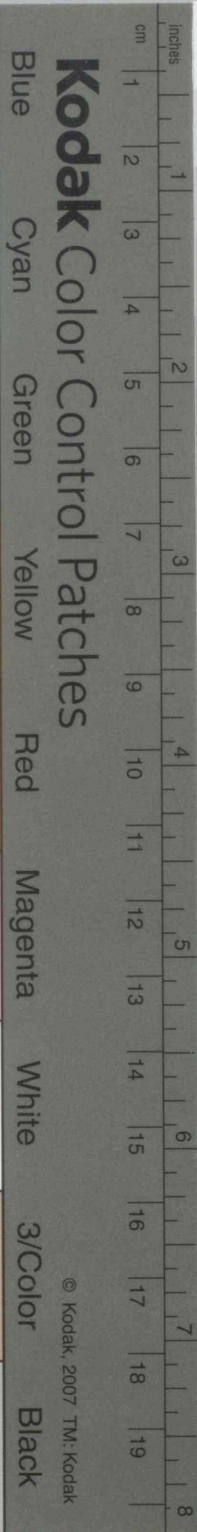
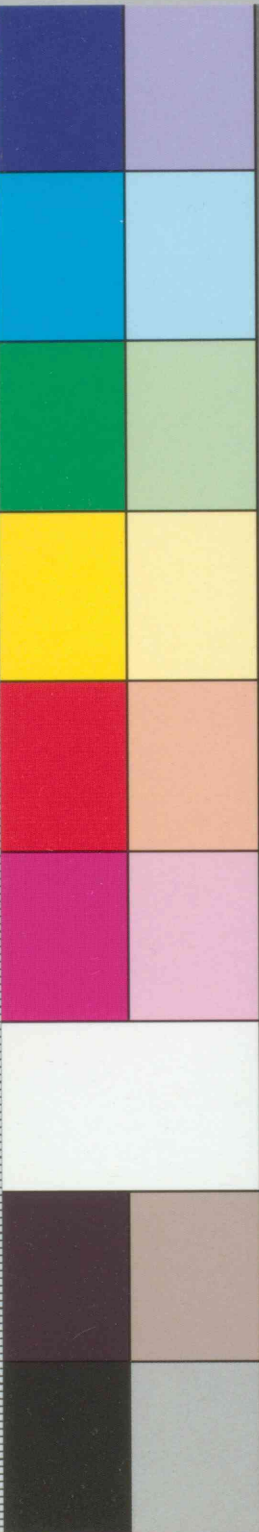


中國文教科書

卷七

教科書文庫
4
810
41-1941
2000052428



41745

教科書文庫

4
810
41-1941
20000 52428





文部省檢定  
昭和六十一年十一月三十日  
中學國語教科書用

中國  
國文  
教科書

吉田彌平編  
石井庄司補訂

中等學校教科書株式會社

教科書文庫  
4  
810  
41-1941  
2000052428

\*\*\*\*\*  
修正三版  
\*\*\*\*\*



375.9  
Y019



中國文教科書卷七

目次

一	日本精神と武士道	平泉	澄	一
二	春の心	村田春海	九	
三	隨時樓の記	渡邊華山	四	
四	見よや春	〔保元物語〕	七	
五	鎮西八郎	〔平家物語〕	三	
六	足摺	高山樗牛	三	
七	平家の最後		元	

卷七 目次

一

広島大学図書  
2000052428  




八 旅人芭蕉

荻原井泉水

四

首途

四

神路山

五

西行庵

五

九 青葉

六

一〇 奥の細道

松尾芭蕉

六

出立

六

平泉

六

立石寺

六

金澤

六

一一 頼山陽

朝比奈知泉

七

一二 水蓼

萩原廣道

七

一三 千里が竹

近松門左衛門

八

一四 おのが物まなび

本居宣長

九

一五 江戸時代の文學

一〇

一六 光頼卿の参内

〔平治物語〕

一六

一七 人臣の道

北畠親房

一四

一八 俚諺論

大西 祝

一五

一九 四時のあはれ

兼好法師

一三

二〇 民謡

島木赤彦

一五

二一 旅行

山路愛山

一四

二二 斑鳩の宮

三木露風

一四



二三 日本文化の優秀性……………鹿子木員信 一七

目次終

# 中國文教科書 卷七

平泉澄

國史家  
文學博士  
東京帝國大學教  
授  
明治二十八年(二  
五)福井縣生  
先年  
昭和六年  
マルセイユ  
フランス地中海  
岸の海港

## 一 日本精神と武士道

平泉澄

予は先年巴里に在つて、折から亞細亞諸國巡遊の旅を終へてマ  
ルセイユに歸着せる佛蘭西の一文學者の旅行記を感慨深く讀  
んだことがある。かれの旅行は、西藏南支北支蒙古滿洲日本瓜  
哇に互り、就中滿洲と日本とに最も好奇の胸を躍らせたといふ  
のであるが、特に、亞細亞が餘りに歐化して、既にその特色を没却  
せることを歎き、亞細亞は最早存在せずと評してゐる。  
亞細亞は既に失はれたり！  
いみじくも喝破せるものかな、こ



の言。一面に彼の僭恣驕逸と、一面に此の卑屈怠慢と、兩々相俟つて、亞細亞はその文化の純粹性を失ひ、或はその精神的、或はその經濟的、或はその政治的獨立を失つてしまつたのであつた。世界文明の生みの母とさへ誇られて、古くより歴史の上に燦然たる光輝を放ち來つた亞細亞は、今徒に歐米の勢力に屈服從屬してしまつたのである。かくの如く眠れる亞細亞が、その長き眠より目覺めて、その政治的經濟的及び精神的獨立を取戻し、その本然の姿にかへり、本來の面目を發揮し、その道に於て世界の匡救に力を盡くすことこそ、今日の緊急必要事ではないか。世界の匡救は、亞細亞の自覺復興を先決とする。而して亞細亞の自覺復興は、日本の自覺發奮を第一としなければならぬ。これを客觀的に考察する時、失はれたる亞細亞に於ける唯一の世

界的強國として、亞細亞を指導し、鼓舞し、保護する大任は、正しく日本に歸しなければならぬ。またこれを主觀的に考へるならば、我等日本人は、己先づ目覺めたる以上、宜しく蹶起して曉鐘を亂打し、以て隣人の昏睡を警醒すべく、これを遂行するに、幾多の困難危險を覺悟しなければならぬ。その困難危險の爲に、當然負ふべき大任を忌避すべきでは、斷じてない。然らばこの大任を負ふ日本は、その大任を負ふが故に、殊に深き反省を先づ己自らに要求しなければならぬ。何となれば、己歌はずして人を歌はせる事は出來ず、己起たずして人を起たせる事は出來ないからである。苟も他を覺醒せしめんとする以上、己自ら先づ十分に覺醒しなければならぬ。

現時の日本は、不幸にして未だ十分にその反省自覺を了してゐ



ケーベル

獨逸の哲學者・音樂家

東京帝國大學文科大學教師

(西曆一八四一—一九一三)

一山一寧

臨濟宗の僧

支那宋代臺州の人

我が國に來朝し

建長寺・圓覺寺・南禪寺等に住む

文保元年(一一七〇)寂

年七十一

建長寺

臨濟宗の寺

鎌倉五山の

一

虎關師練

臨濟宗の僧

俗姓藤原氏

本覺國師

正平元年(一一〇〇)寂

年六十九

山鹿素行

名は高福

通稱茂五右衛門

備前・兵學者

會津の人

貞享二年(一七二五)卒

年六十四

贈正四位

四

ない。日本の現状を以て直に日本の本來の面目と誤認するな  
かれ。日本が日本らしからざるは、即ち日本らしき日本の失は  
れゆけるは、既に年久しいことである。曾てその深刻なる觀察  
を以て、能く日本を理解し、深く日本を愛したる哲人ケーベルは、  
西歐俗悪の物質文明が日本固有の高き精神文化を驅逐しつゝ、  
あるを見て、純粹の日本の亡びるのは、恐らく遠い將來ではある  
まいと慨歎したのであつた。殊に我が國の所謂學者識者が偏  
に外來文化に心酔して、自國の傳統を無視するは、古來の弊風で  
あつて、今に始つたことではない。六百年前、宋僧一山一寧は、建  
長寺に來つて虎關師練を見、その印度支那の事情に通じ、古今に  
互る博識に驚くと同時に、その生國日本に關する無知に呆れ、大  
いに師練を警策したことがある。又三百年前、山鹿素行は、多年

臨濟宗  
南禅寺の僧

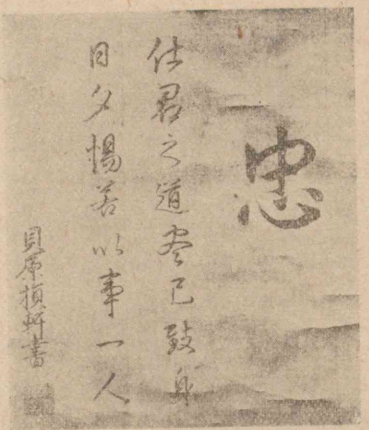
の學問が専ら異國の書籍にのみ依り、隨つて自然に本朝を卑し  
み、異國を尊ぶ學者古來の通弊に墮した事を自ら懺悔してゐる。  
思ふに我が國の學者識者といはるゝほどの人にして、外國の書  
籍に讀み耽らざるはなく、讀み耽つては自然これに心酔し、心酔  
してはいつしか我を卑しむ、彼を尊び、内外本末を顛倒するに至  
らざるはない。かゝる弊風は古くより存する所であるが、特に  
今日に於ては益、その顯著なるものがあるのである。自國の使  
命に目覺め、大にしては世界の匡救に、小にしては亞細亞の覺醒  
に貢獻せんとする日本は、先づその内に存するこの弊風を除去  
して、眞に日本らしき日本に還り、純乎として純なる日本精神に  
蘇らねばならない。自ら眠りつゝ、他を醒し、己溺れつゝ、人を救  
はんとするは、僭越であり、又滑稽である。こゝに一切の問題の



先決として吾等當爲の急務は、日本人をして眞に日本人たらしめ、日本をして眞に日本たらしむること、即ち日本人の間に於ける日本精神の復活を完うすること、でなければならぬ。日本精神の復活の上に最も重要なるは武士道の復活である。武士道の精神は直に日本精神の全體を蓋ふものではない。しかし武士道は實に日本精神の精華とたゞへらるべきものである。随つて今日日本精神の復活に際し、その基礎として先づ喚起さるべきは武士道の精神であると信ずるのである。内には物慾にとらはるゝ事を卑しんで魂の自由を求め、己の生活に於ては、分に安んじ足るを知り、而して外には忠孝の二つをもつて道德の極致とし、しかもこの忠孝の二つが究極して忠の一字に歸着することを明確に認識し、奉公隨順の誠を效すは、日

本精神の根本核心とするところ、必ずしも特に武士道といふを要しないのである。しかし特に注意すべきは、武士道の名に於てこれを喚起す時、苟も道義の磨くところ、喜んで死地に入り、一

筆蹟  
忠  
仕君之道、盡己致身、日夕惕若、以事一人。  
貝原損軒書  
君ニ仕フルノ道ハ、己ヲ盡クシ、日夕惕若シ、日夕惕若以テ一人ニ事フルニアリ。



貝原損軒書

命を效さんとする義烈の氣象の、これに伴なひ來る事である。即ち武士は、日本人の道を、命にかけて躬行實踐し、その爲には潔く散つてゆかうとする氣象に於て秀でてゐるのである。この義烈の氣象を喚起す事なくしては、日本精神を説いて千言萬語を費すとも、畢竟無用の戲論たるに過ぎぬ。思ふに明治四年の廢藩、同九年の廢刀は、一般に武士の滅亡を意







紀友則  
平安朝時代の歌人

紀貫之の甥  
古今集撰者の一人

鮮麗

いしやまへまう  
てけるとおと  
はやまのもみち  
をみて

きのつらゆき  
あきかせのふま  
にしひよりおと  
はやまみねのこ  
すゑもいろつぎ  
にけり

寛平の御時

宇多天皇の御代  
紀貫之

平安朝時代の歌人

古今集撰者の一人

天慶九年(一〇〇〇)

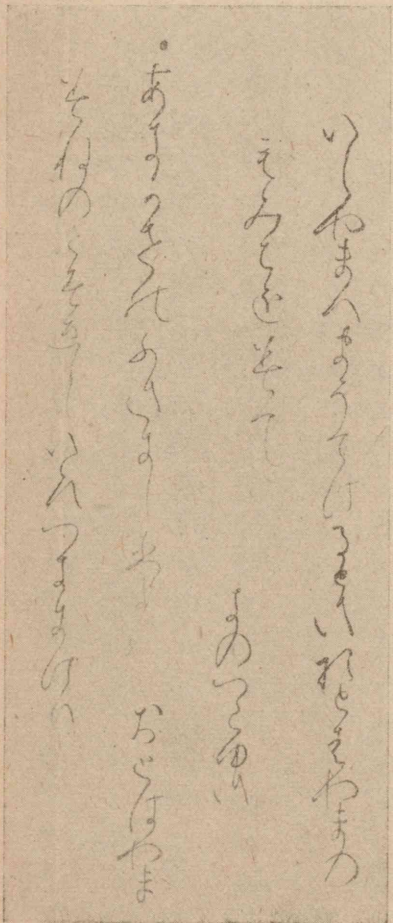
卒  
年六十五  
贈従二位

まし

櫻の花のちるをよめる

紀友則

ひさかたの光のどけき春の日にしづごころなく花のちる  
らむ



寛平の御時皇后の宮の歌合の歌 紀貫之

傳紀貫之筆

清原深養父

平安朝時代の歌人

延喜・延長年間の人

藤原敏行

平安朝時代の歌人

延喜七年(一〇三六)  
卒

夏のよのふすかとすれば時鳥なくひとこゑにあくるしの  
のめ

月の面白かりける夜曉方によめる 清原深養父  
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどる  
らむ

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろか  
れぬる

題しらず

よみ人しらず

しらくもにはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋の  
夜の月

仙宮に菊をわけて人の到れるかたを



素性法師

俗名良孝支利

平安朝時代の歌人

僧正遍昭の子

よめる

素性法師

ぬれてほす山路の菊のつゆのまにいつか千年をわれは經にけむ

題しらず

よみ人しらず

ふる雪はかつぞ消ぬらし足びきの山の瀧つ瀬おとまさるなり

大和國にまかれりける時に雪の降り

坂上是則  
平安朝時代の歌人

坂上是則

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれるしらゆき

けるを見てよめる

春道列樹  
平安朝時代の歌人

春道列樹

昨日といひ今日とくらして飛鳥川流れてはやき月日なり

年のはてによめる

大江千古

昔人の子

平安朝時代の歌人

藤原兼輔

平安朝時代の歌人

白山

加賀の白山

みかの原

京都府相樂郡瓶

原村

いづみ川

木津川の古名

かせ山

鷹野山

奥川に流るる

けり

人の馬のはなむけにてよめる 紀 貫之

をしむからこひしきものを白雲のたちなむのちは何どこちせむ

大江千古が越へまかりける馬のはなむ

けによめる

藤原兼輔朝臣

君がゆくこしの白山しらねどもゆきのまにく跡はたづねむ

題しらず

よみ人しらず

都いでて今日みかの原いづみ川かは風さむしころもかせやま

あひ知れりける人の身まかりにける時



壬生忠岑  
平安朝時代の歌人  
古今集撰者の一人

によめる

壬生忠岑

ぬるが内に見るをのみやはゆめといはむはかなき世をも  
うつゝとは見ず

題しらず

よみ人知らず

むらさきのひともとゆゑに武藏野の草はみながらあはれ  
とぞ見る

題しらず

よみ人知らず

われ見てもひさしくなりぬすみのえの岸の姫松いくよへ  
ぬらむ

(古今和歌集)

すみのえ  
住吉  
大阪市住吉區  
村田春海  
國學者  
賀茂眞淵の門人  
江戸生  
文化八年(西暦一  
年六十六

三 隨時樓の記

村田春海

うつせみの世の人のことわざよろづにさまぐなれど時にそ

古の人も

すさまじきもの、晝ほゆる犬  
春の綱代、  
八月のしろがさ  
ね乳あへずなり  
ぬる乳母  
(枕草子第二十  
一巻)



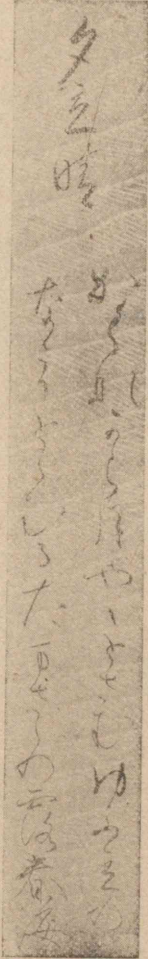
村田春海  
東京帝室博物館蔵

むき折にあはで、しからざらむは、いみじきふしなりと  
もいかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火の濫か  
なるを思はず、冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。古の

人も春の綱代、葉月の白襲をこそ  
すさまじきことの例には引きい  
でたりけれ。かゝればはかなき  
すさみも折にあひたるはをかし  
く、見所なき本草も時を得たるは  
めづらかなになむおほゆめる。し  
かはあれど、人ぐさ繁き巷の所せぐ門立ち並べたらむあたり  
に、時はすぐし折を失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にう  
れど、水によしあるは山遙かにて、四つの時のゆきめぐるに、隨ひ



て心をやるべき住居はいともくかたしや。こゝに前田のぬしの高殿こそあやしく所得てはおぼゆれ。しりへは市路に續くものから前は世ばなれたるのぞみあり。春はむかつをの花のかをりを居ながら袂にしめ、夏はみなぎは清き池の蓮葉を舟ならずして手折り、秋は月に嘯き、冬は雪にうた



筆海春田村

筆蹟  
夕立晴  
かくなから月や  
ととむゆふ立  
のなこりとむ  
るたまさの露  
春海

ふも、すべて山水のあはれを添へざる折なむあらざりける。ましてあるじの言の葉もて友にまじらふこと廣ければ、時にふれ折を過ぎず訪ひ来る人々、皆みやび好まざるはなし。かくとこしへに飽く世も知らぬ高殿なればとて、聞中大徳のことさら

に時に随ふてふことをもて名づけられたるは、深き心しらひにこそありけらし。(琴後集)

四 見よや春

渡邊 華山

私十二歳の時、日本橋通を通行仕候節、忘れも仕らず備前侯の御先供に當り、打擲を受け申候。當時子供ながらも大息して、備前侯は御歳大抵私と同年位なるに、大衆を率ゐて天下の大道を御横行なされ、私は同じ人間にて、天分とは申しながら、その御先供に當りて打たる、事發憤に堪へず、今より何なりと志し候はば、如何なる儀にても出来申すべしと存じ、その頃高橋文平とて御祐筆相勤め申候者、私子供には候へども、日頃合口にて候間、この者に相談に及び、爽鳩先生

渡邊華山  
名は登  
三河國田原藩の  
志士  
畫家  
天保十二年(一  
〇切版  
年四十九  
贈正四位  
爽鳩先生  
鷹見正長  
田原藩の家老  
學者  
文化八年(一  
七六一年六十一



の門に入り、儒者に相成り申すべしと決心仕候。さりながら私親父二十年來の持病にて、一日も看病、按摩を缺き難く候間、朝夕退食の間、これを奉公同様に相心得、母の手助け仕候。その上兄弟皆幼少にて、七人程もこれあり、唯母の手一つにて老祖病、父私どもまでその日を送り候事故、何分些かの餘裕もこれなく候。貧窮最も甚だしく、筆紙に盡くし候處にはこれなく候。これに依つて弟どもは寺に奉公に出し、又は出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣はし申候。私十四歳許の冬、幼少の弟を板橋迄生別れに送り参り候時、ちら／＼降來る雪の中を、八九歳の弟が見も知らぬ荒男に連れられ、後を振向き／＼別れ候事、今に目前に髣髴仕候。右弟は定意と申し、後熊谷宿にて客死仕候。雷之助と申す

板橋  
今の東京市板橋區板橋町  
舊江戸四宿の一  
熊谷宿  
今の埼玉縣熊谷市

青松寺  
芝公園にある曹洞宗の寺  
文明年間太田道灌草創

は、初七歳の時青松寺と申す寺へ奉公に遣はし、後に御旗本屋敷へ養子に遣はし候。是以て食物足らず、困窮の餘りの事に候へば、養子とは申しながら丸裸にて、申さば親不知の様に遣はし申候仕合故、何事に就きても先方里方を侮り候を心外に存じ、終に京都に出奔仕候。その後主人惜しき人物に存ぜられ、引戻され候處、是又數年辛苦仕候爲、かの地にて病



渡邊 山 嶽  
山 嶽

氣に罷り成り、歸府後間も無く相果て申候。右の次第故、妹兩人も、一人は遠方へ遣はし、一人は貧家へ罷り起し、貧死仕候。彼此を考へ候へば、至貧至困、無策無術の上に親父大病



に相繼り候爲、兄弟過半非業同様の病死仕候次第に御座候、これにて當時困難至極の儀御察し下さるべく候。

私母、近來迄夜中寝ね候に、蒲團と申すもの、夜具と申すもの引懸け候を見及び申さず、破畳の上にごろ寝仕り、冬は火燧にふせり申候。私親父大病故、高料の薬種、藥禮、日食の麵類等に事缺き、疊、建具の外大抵質物に置盡くし、猶親類どもにも借盡くし候へば、僅か南簾一片の儀にて、母方身内に當り候山伏の本所一つ目に住居候方へ、母事只今存生仕り居り候助右衛門と申す弟を背負ひ、雪中を冒して罷り越し、夜に入り候うて歸宅仕候、その節私洗足の湯を沸かし候とて衣服を焦し、大いに叱られ候儀、今に覚え罷り在り候。これに依つて猶又高橋文平に相談仕候處、とても學問など致し、儒

南簾

徳川時代の通貨

二朱銀の稱

本所一つ目

今の本所區千歳町

白芝山

白川芝山

名は景略

安政年中(三二四)

一五九)歿

年九十

金陵

金子允壺

江戸の畫人

文化十四年(一八四七)

歿

者に相成候とて、金の取れ候儀はこれなく、何よりも貧を救ふ道第一なりと申すにより、爽鳩先生を頼み、芝の白芝山と申す畫工へ入門仕候。この時私十六歳に御座候。

然る處、貧人にて附届行届かずとて、僅か二年にて、師家より斷りを受け申候。私もこの時は如何仕るべきかと泣沈み候處、親父申候は、金陵事は大森勇三郎様の御家來に付、その旨申したらば憐み申すべしと申すにより、弟子と相成候處、金陵殊の外相憐み、少々は出來候様に相成候。さりながら、半紙を調へ候手段これなく候まゝ、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢を取り、日本橋二丁目遠江屋、麴町天神たこやにて憐を乞ひ、多分に相成候へば、右を以て紙筆を調へ申候。かく仕候間にも學問は仕りたく存じ候へども、何分閑



文晁  
谷文五郎  
江戸の畫人  
天保十二年(三〇  
一)歿  
年七十八

暇これなく候へば、冬に相成候へば朝七つ時に起出で、飯を  
焚き、その焚火にて讀書仕候。右は私を憐み畫道に於て種  
種取立てくれ候文晁が毎曉起出で畫を認め候話を承りて、  
發憤致候  
次第に御  
座候。右  
畫事少々  
宛内職と  
相成、稽古  
も出來候様相成候も、全く前爽鳩先生の恩澤に御座候。  
私二十六歳の正月元日、深く感ずる所これあり、  
見よや春大地もとほす地蟲さへ



郡 鄂 の 快 夢  
波 邊 山 筆

新院

崇徳上皇  
齋院の御所  
皇女又は女王で  
賀茂の社に奉仕  
したまふ御方の  
おはします處  
賀茂川の東(今  
の聖護院の西)  
にあつた  
北殿  
左府  
白河殿  
左大臣藤原頼長  
白河殿  
山城國(京都府)  
愛宕郡二條通の

だけの事を盡くし申さずして百姓に令し候うても、猶更承  
知仕らず候。然らば、上諸侯よりして下足輕に至るまで、治  
安に志これなくては出來申さざる如く、繪事も右の通りと  
相心得候へども、治道の事は如何哉、審に辨へ申さず候。左  
様に御座候へば、畫事も治道も一理にして二理はこれなく、  
畫道を以て治道に試み申すべしとあらんには、随分試み申  
すべく候。  
(畢山全集)

五 鎮西八郎

新院は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府は車にて参り  
給ふ。白河殿より北河原より東、春日の末に在りければ、北殿と  
ぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門を



成り申すべき一事に思を定め申候。  
 繪事にて推測り申候に、第一の心と申すもの立ち申さず候  
 うては、物の形整ひ、落ちなく見事には出来申さず候。又心  
 ばかりやたけに存じ込み候とて、手が心の通り動き申さず  
 候うては、畫成り申さず候。また手ばかり自由に相成候と  
 も、胴體四肢治り申さず候うては、机に向ひ、腹より溢れ候様  
 には出来申さず候。これに依つて總身の中、髪、爪の端  
 まで皆畫に相成候様仕る事にて候。已に古人も、明窓淨几  
 は書の合、風雨擾雜は書の乖と申候。身外のものすら此の  
 如し。まして總身のうち猶更に御座候。今の諸侯如何に  
 や。諸侯にして、國を治めずして家中、百姓に出精致せと令  
 し候とも服従仕る者これあるべく哉。又奉行にても、奉行

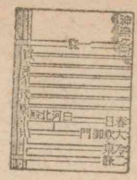
一齋  
 佐藤坦  
 徳川幕府の儒臣  
 安政六年(三五)  
 卒  
 年八十八  
 贈從四位

村松六郎左衛門  
 田原藩の家老

と申す句仕候。これに依つて一齋へ申し談じ、學問仕りた  
 く候へども、何分寸暇なく候へば、夜中にも參り申すべき  
 に付、御門制の儀然るべく御取成下され候様依頼仕候處、一  
 齋よりその趣を書取り、親父へ申遣はされ候趣これあり、即  
 ち親父より村松六郎左衛門殿へ右の儀につき願ひ出で候  
 處、六郎左衛門殿より、儒者にこれなくては御門制の儀仰せ  
 出され難き旨御沙汰を傳へられ候に付、終に折角の志相挫  
 け申候。  
 熟存じ候は、上にして君に忠、下にして親に孝、皆これ學問中  
 より出で來り候儀にこれあり、殊に上へ忠と申す事は無學  
 無術にては叶ひ難し、これよりは愈、以て繪事を専らとして、  
 急にしては親の貧を助け、緩にしては天下第一の畫工と相



北にあつた宮殿  
白河法皇の御所  
であつた



北殿附近

父子五人

父忠正と長男正盛・次男忠綱・三男正綱及び四男正正

父子六人

父爲義と四郎左衛門尉頼賢・五郎掃部助頼仲・賀茂六郎爲宗・七郎爲成及び九郎爲仲

ば平馬助忠正承つて、父子五人並に多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり、その勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて、多分は内裏へ参りけり。こゝに鎮西八郎爲朝は、我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬ様に、只一人、いかにも強からん方へ差向け給へ。たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり」とぞ申しける。依つて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。その勢百五十騎とぞ聞えし。抑、爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力

旁若無人

高漸離筑ヲ擊ツ。荆河利シテ市中ニ歌ヒテ相樂シム。巳ニシテ相泣ク。旁人無キガ若シ。(史記、刺客傳)

の強弓、矢つぎばやの手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、旁若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば悪しかり。なんとて、父不孝して、十三の歳より鎮西の方へ追下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の阿曾平四郎忠景が子に三郎忠國が婿に成つて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を従へんとしければ、菊池原田を始として、處々に城を構へて立籠れば、その儀ならば、いて落いて見せん」とて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術人に勝れて、三年がうちに九國を皆攻落して、みづから總追捕使に押成つ



香椎宮  
 官幣大社  
 福岡市の東四軒  
 香椎村に鎮座  
 祭神は仲哀天皇  
 神功皇后  
 久壽元年  
 近衛天皇の御代  
 (一一四)

て、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、い  
 にし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿とし  
 て、外記に仰せて宣旨を下さる。

源、爲朝、久住、宰府、忽、諸朝憲、成、背、綸言、  
 可令禁進其身、依宣旨執達如件、  
 泉惡頻聞、狼藉尤甚、早

然れども、爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義  
 を解官せられて、前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、  
 「親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。その儀ならば、我こ  
 そいかなる罪科にも行はれんずれ」とて急ぎ上りければ、國人ど  
 もも上洛すべき由申しけれども、大勢にて罷り上らんこと、上聞  
 穩便ならず」とて、形の如くに附從ふ兵ばかり召具しけり。依つ  
 て去年より在京したりしを、父不孝を宥して、今度の御大事に召

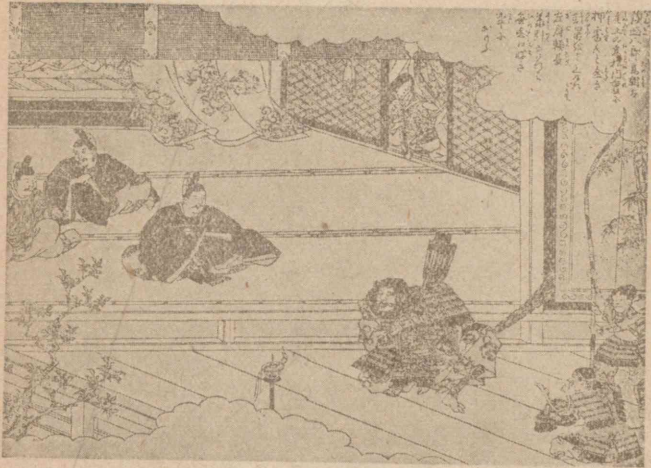
具しけるなり。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色々の  
 糸を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて白  
 き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたる  
 を着るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、  
 長さ七尺五寸にて鉞打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、  
 兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えて  
 ゆゝしかりき。謀は張良に劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子  
 孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥  
 地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始め奉つて、あらゆ  
 る人々、音に聞ゆる爲朝見んとて、擧り給ふ。  
 左府乃ち合戰の趣計らひ申せ」と宣ひければ、畏まつて、爲朝久し

八龍  
 源氏重代の鎧の  
 一  
 樊噲  
 漢の高祖の臣  
 勇猛の士  
 張良  
 漢の高祖の臣  
 智謀の士  
 吳子  
 名は起  
 衛の人  
 兵法の大家  
 孫子  
 名は武  
 齊の人  
 兵法の大家  
 養由  
 楚の人  
 弓の名手



く鎮西に居住仕つて、九國の者ども従へ候について、大小の合戦  
 數を知らず。中にも、折角の合戦  
 二十餘箇度なり。或は敵に圍ま  
 れて強陣を破り、或は城を攻めて  
 敵を滅すにも、皆利を得ること夜  
 討に若くこと候はず。然れば、只  
 今高松殿に押寄せ、三方に火をか  
 入 け、一方にて支へ候はんに、火を遁  
 れん者は矢を免るべからず、矢を  
 恐れん者は火を遁るべからず。  
 主上の味方、心にくくも候はず。  
 但し兄にて候義朝などこそ駈けいでんずらめ。それも眞中さ



高松殿  
 假内裏  
 後白河天皇の御  
 所

して射通し候ひなん。まして、清盛などがへろへろ、矢、何程の事  
 か候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所へ  
 成らば、御免されを蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定め  
 て駕輿丁も御輿を捨てて逃去り候はんずらん。その時爲朝參  
 り向ひ、行幸をこの御所へ成し奉り、君を御位に即けまらせん  
 こと、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ參らせんこと、爲朝矢  
 二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負  
 を決せん條、何の疑か候べきと、憚る所もなく申したりければ、左  
 府爲朝が申す様、以ての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。  
 夜討などいふこと、汝等が同士軍十騎二十騎の私事なり。さす  
 がこの度のみいくさに、源平數を盡くして兩方に在つて勝負を  
 決せんに、むげに然るべからず。その上南都の衆徒を召さるゝ

南都の衆徒  
 奈良の東大寺及  
 び興福寺の僧徒



富家殿  
左大臣頼長の父  
忠實の宇治の別  
邸

吉野法師  
吉野山の僧兵

ことあり、興福寺の信實、玄實等、吉野十津川の指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召具して千餘騎にて参るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見参に入り、曉こゝへ参るべし。彼等を待調へて合戦をば致すべし。又明日、院司の公卿殿上人を備さんには、参らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること、兩三人に及ばば、残りなどは参らざるべきと仰せられければ、爲朝上には承服申して御前を罷り立ちて、咄きけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬことなれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候らん。明日までも延べばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。只今押寄せて風上に火をかけたらんには、戦ふともいかで利あらん。敵勝

つに乗る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな。とぞ申しける。(保元物語)

### 六 足 摺

さる程に、鬼界が島の流人どもの召還さるべきこと定まりしかば、入道相國の赦文書いてぞたうでける。御使既に都を立つ。宰相餘りの嬉しさに、御使に私の使を添へて下されける。夜を晝にして急ぎ下れとありしかども、心に任せぬ海路なれば、波風を凌いで往く程に、都をば七月下旬に出でたれども、九月二十日頃にぞ鬼界が島には着きにける。御使は丹左衛門尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、これに都より流され給ひたりし平判官康頼入道丹波少將殿やおはす。

鬼界が島  
今の鹿兒島縣  
(大隅郡)熊毛郡  
の硫黄島か  
流人  
丹波少將藤原成  
經  
平判官康頼  
法勝寺執行俊寛  
入道相國  
太政大臣平清盛  
入道淨海  
宰相  
參議牛教盛  
成經の妻の父  
七月  
高倉天皇の治承  
元年(一一七〇)



と、聲々にぞ尋ねける。二人の人々は、例の熊野詣して、なかりけり。俊寛一人ありけるが、これを聞いて、餘りに思へば夢やらん、また天魔波旬のわが心を誑さんとていふやらん、現とも更に覺えぬものかなとて、あわてふためき、走るともなく、倒るともなく、急ぎ御使の前に行向つて、これこそ流されたる俊寛よと名乗り給へば、雑色が頸に懸けさせたる布袋より入道相國の赦文取出でて奉る。

これをあけて見給ふに、重科は遠流に免ず。早く歸洛の思をなすべし。今度中宮御産の御祈によつて、非常の赦行はる。然る間、鬼界が島の流人少將成経康頼法師赦免とばかり書かれて、俊寛といふ文字はなし。禮紙にぞあるらんとて、禮紙を見るにも見えず。奥より端へ讀み、端より奥へ讀みけれども、二人とばかり

中宮  
高倉天皇の中宮  
平徳子  
平清盛の女  
後に建禮門院

り書かれて、三人とは書かれず。さる程に、少將や康頼法師も出來り、少將の取つて見るにも、康頼法師が讀みけるにも、二人とばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。  
「夢にこそかゝることはあれ。夢かと思ひなさんとすれば現なり。現かと思へばまた夢の如し。その上二人の人々のもとへは、都より言づてたる文ども、いくらもありけれども、俊寛僧都のもとへは、言問ふ文一つもなし。さればわがゆかりの者どもは、みな都の内に跡を留めずなりにけるよ」と思ひやるにもおぼつかなし。「そもく我等三人は同じ罪配所も同じ處なり。いかなれば赦免の時、二人は召還されて、一人こゝに残すべき。平家の思ひ忘れかや、執筆のあやまりか。こはいかにしたる事どもぞや」と天を仰ぎ地に伏して、泣悲しめどもかひぞなき。



故大納言殿  
藤原成親

僧都、少將の袂にすがり、俊寛がかやうになるといふも、御邊の父故大納言殿の由なき謀叛の故なり。さればよその事と思ひ給ふべからず。許されなければ、都までこそかなはずとも、せめてはこの船に乗せて、九國の地まで着けてたべ。各、これにおはしつる程こそ、春は燕、秋は田の面の雁のおとづる、やうに、おのづから故郷の事をも傳へ聞きつれ、今より後は、何としてか聞くべき。とて、悶えこがれ給ひけり。  
少將、まことにさこそはおぼしめされ候らめ。われらが召還さる、嬉しさも、さることにては候へども、御有様を見奉るに、更にゆくべき空も覺え候はず。この船に打乗せ奉つて、上りたうは候へども、都の御使いかにも叶ふまじき由を頻に申す。そのうへ許されもなきに、三人ながら島の内を出でたりなど聞え候は

ば、なか／＼悪しう候ひなんぞ。成經まづ罷り上つて、人々にもよく／＼申し合はせ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎ひに人を奉らん。その程は日頃おはしつるやうに思ひなして、待ち給へ。命はいかにも大切の事なれば、たとひこの瀬にこそ洩れさせ給ふとも、遂にはなか赦免なくて候べき。と、様々に慰め給へども、僧都堪忍ぶべうも見え給はず。

さる程に船出さんとしければ、僧都船に乗つては下りつ、下りては乗つつ、あらましごとをし給ひける。少將のかたみには夜の<sup>ツ</sup>袈<sup>ツ</sup>康<sup>ツ</sup>頼<sup>ツ</sup>入<sup>ツ</sup>道<sup>ツ</sup>がかたみには一部の法華經をぞ留めける。既に纜解いて船押出せば、僧都綱に取りつき、腰になり、脇になり、丈の立つまで引かれて出づ。丈も及ばずなりければ、僧都船に取りつき、さていかに各、俊寛をば遂に捨てはて給ふか。日頃の情も



今は何ならず。許されなければ、都までこそ叶はずとも、せめてはこの船に乗せて九國の地まで。と、くどかれけれども、都の御使、いかにも叶ひ候まじ。とて、取りつき給ひつる手を引きのけて、船をば遂に漕出す。

僧都せん方なさに渚に上り、倒れ伏し、をさなき者の乳母や母などを慕ふやうに、足摺をして、「これ乗せて行け、具して行け。」とのたまひて、をめき叫び給へども、漕ぎゆく船のならひにて、跡は白波ばかりなり。いまだ遠か



寛 俊  
筆 直 國 川 歌

漕ぎゆく船  
世の中を何にた  
とへむ朝ぼらけ  
漕ぎゆく船のあ  
との白浪（沙彌  
満誓、拾遺集）

松浦小夜姫が  
飲明天皇の御宇  
大伴狹手彦が新  
羅に出立つのを  
送つて

壯里・息里  
壯里・息里とい  
ふ兄弟が織母に  
にくまれて海巖  
山といふ所に棄  
てられたといふ  
印度の傳説

高山樗牛  
名は林太郎  
評論家・哲學者  
文學博士  
山形縣鶴岡の人  
明治三十五年（  
三〇）歿  
年三十二

らぬ船なれども、涙にくれて見えざりければ、僧都高き處に走り上り、沖の方をぞ招きける。かの松浦小夜姫が唐船を慕ひつゝ、領布振りけんも、これには過ぎじとぞ見えし。さる程に船も漕ぎかくれ、日も暮るれども、僧都あやしのふしどへも歸らず、波に足打洗はせ、露に萎れて、その夜はそこにぞあかしける。されども少將は情深き人なれば、よきやうに申すこともやと、頼みをかけて、その瀬に身を投げざりし心の中こそはかなけれ。昔壯里息里が海巖山へ放たれたりけん悲しみも、今こそ思ひ知られけれ。（平家物語）

七 平家の最後

高山樗牛

古より亂離の世には反覆の人あるを免れず、安きを求めて危き



池殿大納言

平頼盛

兵衛佐

右兵衛権佐源頼朝

積善の餘慶

積善ノ家ニハ必ズ餘慶有リ、積善ノ家ニハ必ズ餘殃有リ。

(易經)

十善

不殺生

不偷盜

不邪淫

不妄語

不兩舌

不惡口

不綺語

不貪欲

不嗔恚

不邪見

入道大相國

太政大臣平清盛

入道して淨海といふ

淨蓮大禪門

平重盛の法號

を避くるは、已みがたき人情なればなり。さもさうず、一の池殿大納言が舊恩を頼みとして兵衛佐が芳心を望みしを外にして、平家の一門は、上は大臣、納言より下は衛府、諸司の判官に至るまで、ともなく、に没落の運命を同じうせしこそゆゑしけれ。想へば、積善の餘慶既に家に盡き、積悪の餘殃早く身に及べり。固より頼しからぬ行末かけて、何をか望み、何をか願はん。たゞ十善の帝王三種の神器を帶して今ぞ一門の末路に立たせ給ふいで、いかならん野の末、海の果までも行幸の御供申し、先世の契を踐み、且は重代の芳恩に應へなんず。あはれ、故入道大相國、淨蓮大禪門も照鑑あれ。世は是非なうも武運の末と覺ゆれど、名門の最後はかくこそあるべけれ。凡そ邦家の滅

鬪牆の禍

兄弟の争

兄弟鬪牆ニ闘ゲド

モ、外其ノ務ヲ

棄テ。(詩經)

務は侮

家臣

北條時政

亡必ずしも美はしからず、たゞ平家の没落に至りては、何事の美かよくこれに類ふべき。源氏の興亡の如き、東夷の品下れる、いふばかりなし。重代の仇未だ報いざるに、同門の隙早く開け、四海僅かに一に歸すれば、鬪牆の禍直に起る。兵衛佐はげに智謀に長けたる大將なりしかども、雅びたる優しき心つゆばかりも持たざりき。我執あまりに強かりければにや、嫉深く、心僻めり。されば讒奸動もすれば骨肉の間に入り、一族の連枝、時に路傍の人にも劣れり。權勢幾ばくもなく家臣の手に落ち、宗家早く祀を絶てども、一人の義に殉ひ恩に死するものなし。かくの如くにして兵威何の頼むところぞ、利運何の喜ぶ所ぞ。かくの如くにして衰亡する、誰かまた一掬の涙を瀧ぐものぞ。盛衰興亡はもと人事の常、寧ろ深く喜憂するに足らざらん。唯その運命に



木曾  
源義仲  
壽永三年(一二三二)  
粟津に戦死  
年三十一



平家の都落 春日権現験記

當る人、心優しく情美はしからば、何の幸慶かよくこれに加ふべき。あゝ、我をして時を同じうせしめんか、願はくは源氏となりて興らんよりも、寧ろ平家となりて亡びなん。

平家はさすがに没落の際まで大義名分を執りて動かざりしは、ゆゑ、しくも亦あはれの極みなりき。木曾は兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ひて院宣を受けけれども、孤軍もとより勝算なし。のち使を西國に

立て、合體して兵衛佐討つべきよしを言送りぬ。平家の答はかくなりき。

よしや世は季になりぬとも、木曾などにかたらはれて、いかでか都に上るべき。畏くも十善の帝王三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須らく甲を脱ぎ、弦を外し、來りて軍門に降るべし。さらば東國征討の御供にも加へらるべきか。

あゝ、何ぞその言辭の堂々として没落のやからに類はざるや。平家人に乏しきも、一時の權變を弄びて頼勢を回さんとだに思はば、かゝる時こそ乗ずべき機會なれ。さるを名分の正しきを執りて成敗の數を顧みざりき。若し偏に利害の眼よりせば、迂は即ち迂ならんも、かくして滅びんは、ま詬を含みて存まへんよりも、いかばかり美はしかるべき。



大宰府

今の福岡縣筑紫

郡水城村

緒方の三郎

名は雅義

一院

後白河法皇

平大納言

平時忠

清盛の妻時子の

我が君

安徳天皇

東夷

源賴朝を卑しめ

本三位の中將

平重衡

その太宰府に落ちゆくや、緒方の三郎使して申しけるは、

まことに重代の芳恩を思はざるにあらざれども、一院の仰も  
だし難ければ、九國に置き奉るべき地も候はず。

平大納言乃ち衣冠束帯して、出向ひて宣ひけるは、

それ我が君は、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ。祖

宗歴代の神靈我が君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保

元平治以來度々の逆亂を鎮めて、九州のものどもをば皆内さ

まへこそ召されしか。然るを何ぞや、かゝる重恩をも打忘れ

て、東夷の下知に従ふこそ奇怪至極なれ。

本三位の中將一の谷に捕はるゝや、院宣屋島に下りて、かうぞ傳  
へける。

三種の神器都に上せよ、重衡を放ち還さん。

通盛

平教盛の子

平家の請文こそはまことに莊重ならびなかりしか。曰く、

院宣謹みて承り畢んぬ。通盛卿以下、一の谷にて討たれける

ものその數少からず。何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三

種の神器は正統の天子一日も御身を離し給ふべきにあらず。

抑我が君は故高倉の院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四

年、東夷北狄の禍に遭ひて暫く西國に行幸あるのみ。天に二

日なく、國に二君なし。還幸なからんに於ては、神器などか都

に還るべき。抑、賴朝は逆賊の裔幸に入道相國の慈悲により

て申し宥められしところなり。然るに忽ちにしてこの鴻恩

を忘れて妄に干戈を弄ぶ。神罰やがてその身に返るべきか。

君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思し召し忘れずば、

逆賊の裔に與し給はずして、早く西國の御幸あるべきか。一

高倉の院

第八十代高倉天

皇

後白河天皇の第

五皇子

養和元年（八四〇）

崩

北狄

木曾義仲を卑し

めていふ



高麗 朝鮮  
天竺 印度  
震旦 支那  
芭蕉 徳川時代の俳人  
伊賀上野の人  
元禄七年(一六六八)  
歿  
年五十一  
貞享元年(一七二四)  
芭蕉四十一歳歸  
省のため江戸深  
川の芭蕉庵を出  
發して東海近畿  
を吟行し翌年四  
月江戸に歸つた  
本文はこの旅の  
さまを記したも  
のである

萩原井泉水  
名は藤吉  
俳人  
明治十七年(一八八六)  
東京市生

門の武運こゝに盡きなば、鬼界高麗天竺震旦の果までも罷り  
なん。悲しいかな、人皇八十一代が間傳承あやまりなかりし  
靈寶、今にして全く異國の寶とならんとは。宗盛頓首謹みて  
申す。

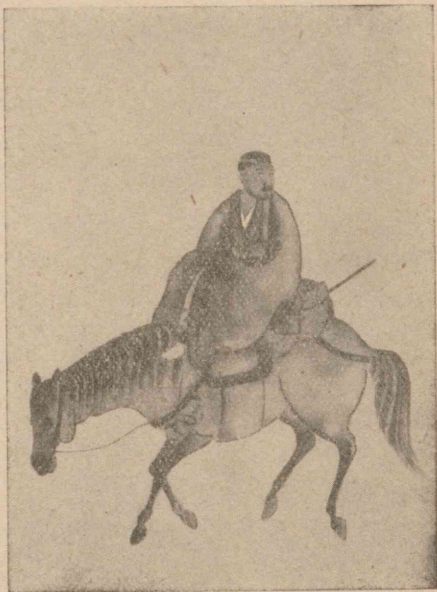
かくて平家は亡びき。亡びしまでも成敗の爲にその名節を枉  
ぐることをなざざりき。あはれ平家の世盛は誠に大いなりし  
が、その没落の更に大いなるには及ばざりき。美はしきかな平  
家、かくして亡びたりとて、何の恨むるところぞ。〔穉牛全集〕

### 八 旅人芭蕉

#### 首 途

芭蕉は黒い法衣をつけ、脚絆と草鞋とで長旅の装束をかためた。

萩原井泉水



芭蕉 西島百歳筆

身につけた物は、行脚の僧が用ひるやうな頭陀袋と笠と杖とだ  
けだった、そして禪宗の僧が用ひる木の實の珠を綴つた數珠を  
手に持つてゐる様は、全  
く雲水の僧侶としか見  
えなかつた。頭もきれ  
いに剃つてゐた。彼は  
脊も低く肉も痩せてゐ  
る上に、持病の痔疾のた  
めに姿勢が痛々しかつ  
た。たゞ顔容にはどことなく犯し難い颯爽たる様が表れてゐ  
た。それは弱い體力に打勝たうとする強い氣力の閃であらう。  
色白な薄痘痕のある細い面立に、鼻が高く、顴と頤とが如何にも



神經質らしく尖つて、一文字の濃い眉と、きつと結んだ唇とが意志的な精根を示してゐる——その常に見慣れてゐる師の顔が、この日は殊に澄んで、凜とした決意を藏してゐるやうに、弟子たちの心に深く印象せられた。

彼は久しぶりで故郷を慕つて歸省するとはいふものの、そこには父も居らず、母も自分が江戸に来てゐる間になくなつた。肉親としては兄一人あるだけである。朋友知人とても、十年餘りも歸つたことのない自分を忘れてゐるかも知れぬと思はれる。彼の愛を惹くものは、故郷の人々よりも、寧ろ江戸に居る門弟たちであつた。自分の爲に快い水邊の巢を二度まで造つてくれた彼等の好意と、自分の旅立を送つて、かく心からの名残を惜しんでくれる彼等の純情とを思ふと、この深川こそ、自分の本當の

水邊の巢

靈元天皇の天和三年(三四三)江戸深川六間堀の芭蕉庵再建

さながら故郷を  
秋十とせかへつ  
て江戸を指す故  
郷(芭蕉、野ざら  
し紀行)

故郷のやうな氣がした。初は故郷へ歸らうとして喜んでゐた心が、いざ出立するといふ時になると、不思議にも、さながら故郷を立出でるもののやうな哀愁をさへ覺えるのであつた。その上に、彼は心では強い信念をもつてゐるものの、この長旅が無事に終へられるだらうかといふ懸念がないではなかつた。東海道を下つて伊賀までの道は、曾て通つた處ではあるが、その時は三十歳に満たぬ血氣の壯な頃であつた。今では自分の體力がまるで違つてゐるやうだ。それでも、宿々の便りの多い海道のことだから、どこで暮れたとて苦しむこともあるまいが、若し途中で病氣にでもなつたならば、とても救はれまいといふ氣がする。而して、その豫感が何となく眞實性を帯びてゐるやうにも思はれる。弟子たちは、彼の爲に送別の句を呈して一覽を請



うた。彼も亦留別の句を書いた。  
 野ざらしを心に風のしむ身かな  
 師の首途の吟が、悪い識をなすものでなければ幸だがと、弟子たちは眉を擡めた。彼自身にも、道端の草の上に自分が打倒れてゐる姿——蕭々と吹く秋風の中に、誰のとも知れぬ白骨が晒されてゐる様——が眼に見えるかとも思はれたりした。しかし、それは自分の句が作り出す幻想なのだ、ほんの假想でもそれを句に仕立てて見ると、如何にも現實のやうに思はれるのは、よくあることだと思ひ知りながら、彼は見送に集つた弟子たちと袂を分つた。八月の空は薄ら曇つて、本當に秋風が身にしむ程の冷氣を感じずる日であつた。

神路山

神路山  
 内宮の神苑を繞つて南方に延びてゐる丘陵

大井川  
 東海道の大川

筆蹟

大井河をこゆる日は終日雨降りければ

秋の日の雨江戸に指をらむ大井川

馬に乗つて

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

金谷

静岡縣榛原郡金谷町  
 東海道五十三次の宿驛

遠江から三河路へはいつてからは霖雨もあがつて、毎日々々青い高い空が仰がれた。遠くの國から渡つて來る小鳥の群も見られた。驛傳の馬の鈴がしやん／＼と晴々しく鳴り、飛脚が馳せて行くあとを、蜻蛉がすい／＼と追つたりしてゐた。芭蕉はもう大分遠く來た思がした。大井川を越えて金谷を立つ時、まだ夜の明けぬ中から馬に乗つて、餘り睡たいので、うつら／＼と睡りながら揺られて來たが、



野ざらし紀行  
 與謝芭村筆



小夜の中山  
金谷町から同縣  
小笠郡日坂村へ  
越える峠

桑名  
三重縣桑名市  
四日市  
三重縣四日市市

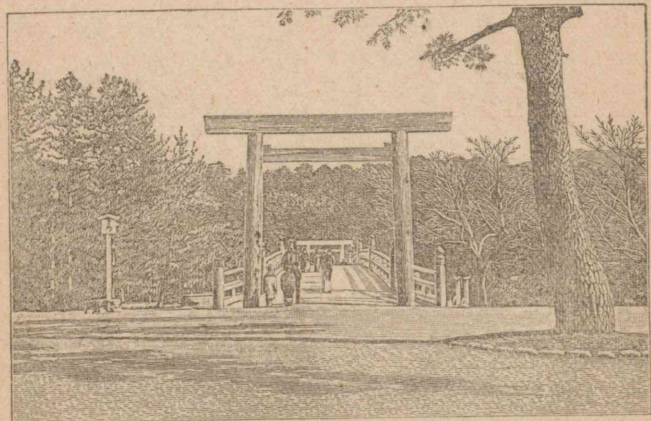
津  
同縣津市  
松阪  
同縣松阪市  
五十鈴川  
内宮の側を流れる川

小夜の中山と聞くあたりで、二十一二夜の月が水のやうな空に消残つてゐるのを見た、その月もいよ／＼瘠せた。宿に着いてから、途中で得た句を推敲してゐると、雁が闇夜の空をかや／＼と鮮かに鳴いて過ぎたりした。八月も末になつてゐた。桑名あたりに来ると、芭蕉は久しぶりで故郷に近い訛り言葉を耳にして懐かしく思つた。故郷への道は四日市の外れにある追分を右にとるのであるが、彼は伊勢の神宮に参拜して行きたいので、道を左へとつた。津や松阪のひなびたにぎはひも、彼には寂しい親しさがあつた。宇治橋を渡ると、今更ながらおのづと襟が正された。神路山の神代ながらの翠を仰ぎ、五十鈴川の八千代をかけての清さを見て、彼は江戸を出てからの途中の勞苦もすつかり洗はれたやうな旅の甲斐を覺えた。しかし、神殿

伊勢大神宮附近



和光同塵  
佛が本地をかくして人間に垂跡すること  
老子の「其ノ光ヲ和シ其ノ塵ニ同ジクス。」から出た語



に近く入つて参拜したいといふ彼の願は、彼が僧形をしてゐるといふために許されなかつた。神佛一如、和光同塵といふ信仰も世には行はれてをりながら、この神宮だけは儼としてその別を立ててゐた。宇治橋は儼としてその別を立ててゐたのも有難いことではあるが、彼がただ髪を剃つてゐるからといつて、實際は僧侶でもないものを、僧侶と斷じて斥けられることは遺憾にもあつた。彼は靜かに内宮を退いてから、日の暮れるのを待つて外宮に詣でた。こゝではさして嚴しい掟も



ないらしく、その上に夜に入つての事であるから、やかましくもなかつた。折から嵐を催すらしい険しい空が、さらぬだに闇の夜を、一層底の知れぬやうな暗さにしてゐる中に、一の鳥居の邊から奥の方へ、ぼつくとほつてゐる燈明だけが、寂しさに堪へて澄んでゐる魂の尊い姿であつた。宮の背後にある峯の態も、夜目には見えないが、大きな聖なるものがびつたりと迫つてゐることは感じられた。松の枝を鳴らす風がさわくと身に降りかゝつて来る。杉をゆすつて過ぎる強い風がごうくと高い空を翔つてゐるらしい。この松や杉は、皆千年の生を享けてゐるものであらう。而して今、この地上の秋を枯らして行く嵐の中に、神代ながらの力を以て轟々と立つてゐるのであらう。彼は不朽に傳はる生命の根強さを明らかに感じた。而して、總

三十日

芭蕉の句  
野ざらし紀行に  
見えてゐる

西行庵

西行法師の遺跡  
吉野山の東嶺な  
る青根の安禪寺  
を距る西北二百  
餘米にある

勝手の社

吉野山八神の一  
吉野山中にある

子守の社

吉野山八神の一  
勝手の社の奥の  
方二軒

奥の院

吉野山大峯の奥  
の院  
奈良縣吉野郡天  
川村の山上嶽に  
あつて藏王權現  
を祀る

べての生命がその根を置いてゐる各自の國土に對する愛情をしみくと感じた。

三十日月なし千歳の杉を抱く嵐

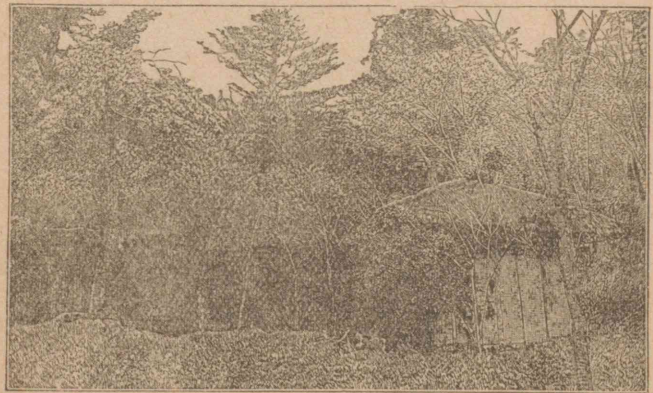
その夕は八月三十日であつた。彼は自分の身が濡れ盡くすやうな、べつとりと濃い闇に、身邊の冷えるのも忘れて、いつまでも木々の神祕な囁を聞いてゐた。心は神の燈明のやうにますます澄んで來た。

西行庵

勝手の社、子守の社に詣でて奥の院に到ると、上千本、中千本と呼ばれてゐる眺望の臺地も眼の下になつて、鳥の聲さへ稀に聞える程に、山の氣がしんと澄みわたつてゐた。芭蕉は吉野の山に來たにつけて、第一に西行が庵の跡を尋ねたく思つてゐた



のであつた。それは奥の院から右の方の細い路を分入れと教へられたが、山賤が柴を樵りに通ふだけに踏みかためた處なので、その上足がかりも険しい谷を越さねばならなかつた。しかし僅か二町ばかり來た處にそれは見出された。丸木の柱を立てて無雜作に萱を葺いたもので、今は四方を蔽ふものさへもない。これは一度朽ちたのを、後人が建直したものかとも思ふが、それにしても、よくもその址が湮滅しなかつたものだと思つた。彼は伊勢に於ても、西行が庵の址を見て、しみじみこの上



西行庵

西行が庵  
その址は三重縣  
度會郡菩提山の  
西三百米ばかり  
にある

人が慕はしく思はれたのだが、このやうに人げない地を選んで、獨り自分と自然との默契を樂しみつゝ、三年の長い間を籠居したといふ上人の心持には、首が垂れる外はなかつた。上人は都に妻と幼い童とを残して來ながら、この山の美しさと靜かさを以て魂を磨き上げようとしたのだ。自分には故郷にも江戸にもそれほどに心を牽かれる何人もないが、それでゐて上人ほどの澄心三昧には徹しきれぬやうな氣がする。しかし、上人とても佛道を求むるといふ堅い道心ばかりではなかつたのであらう、上人は確に藝術の道に心を苦しめてゐた人に違ない。

吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむと歌つた心には、自然の大きさに陶醉しきつた境地に自ら足りてゐる所が見えるではないか。又

吉野山  
新古今集に見え  
てゐる



ねがはくは  
續古今集に見え  
てゐる

ねがはくは花の下にて春死なむその如月の望月の頃  
と歌つた心には、自然の美しさに自我を没しきつた所に藝術の  
涅槃境を見出した意がうつつてゐるではないか。かやうな涅  
槃を求めつゝ、上人は歌道に精進してゐたのだ。上人が歩んだ  
路は正に自分が歩むべき道だと思ふと、芭蕉はこの様な山の奥  
にある上人の足跡が、他の人の爲ではない、自分の爲に上人が残  
して置いてくれた尊い業であるとも考へられた。

庵の址から少し離れて、上人が汲まれたといふ苔清水も残つて  
ゐた。それは苔むした岩が自ら壺をなしてくぼんだ處に、木の  
根から滴る水がたまつて澄んでゐるのであつた。上人が

浅くともよしや又くむ人もあらず我に事足る山の井の水  
とくくと落つる岩間の苔清水汲みほす程もなき住居かな

浅くとも  
山家集に見えて  
ゐる  
とくくと  
山家集に見えて  
ゐる

などと詠じた歌を想ひ起しつゝ、今も昔に變らずとくくと幽  
かな音を立てて落ちてゐる清水を見ると、上人の面影が彼の眼  
前に髣髴とするやうにも感じられた。又、上人は歌に、自分は俳  
諧に、その依る所こそは違つてゐるけれども、一つの詩の道たる  
に違ひはない、而して、この道が實に幽かにして細いが故に、本當  
にこれを求め、こゝに遊ぶ人は如何にも少いのだ。しかし、この  
路が如何に細く微かであるとはいへ、正しい詩の精神は涸れる  
といふことはないのだ。この清水が上人の昔から日がな夜が  
な涸れるといふことがなく、たとひそれを汲む人はなくとも、滴  
り滴つて歇む時がないといふ事實こそ、詩の道の尊い暗示とな  
るものでなくて何であらう。芭蕉はほとりくと鳴る清水の  
潺を聞きながら、不思議に悠久な、又、幽玄な感じに打たれた。而



露とくく  
芭蕉の句  
野ざらし紀行に  
見えてゐる

して、上人の如き無上の境界に自分も早く達したいといふ念願  
に心が冴えて来るのを覺えた。

露とくくこゝるみに浮世すゝがばや (旅人芭蕉)

九青葉

くたびれて宿かるころや藤の花  
ほろくくと山吹散るか瀧の音

芭蕉



筆蕉芭尾松

筆蹟  
雲の峯いくつ崩  
れて月の山  
桃青

五月雨をあつめて早し最上川  
菊の香や奈良には古き佛たち

鬼貫

上島氏  
俳人  
元文三年(三三六)

鬼貫

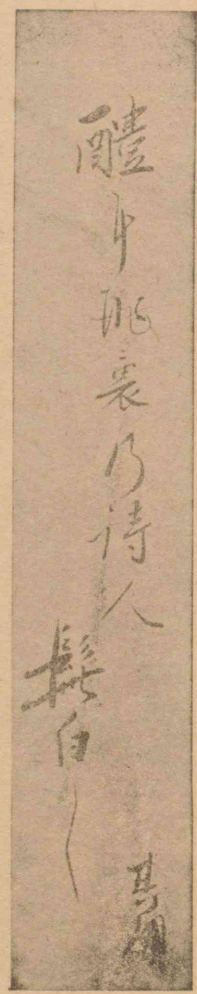
素堂

山口氏  
俳人  
享保元年(三五六)

素堂

其角

榎本氏  
俳人  
寶永四年(三五七)



筆角其本榎

筆蹟

體に桃裏の詩人  
髭白し  
其角

去來

向井氏  
俳人  
寶永元年(三三四)

其角

去來

夕だちや家をめぐりて鳴く家鴨  
投げられて坊主なりけり辻相撲  
秋風や白木の弓に弦はらん



筆蹟  
あかりほの淡路  
はなれぬ鹽干哉  
去來

嵐雪  
服部氏  
俳人  
寶永四年(三三六)  
歿

筆蹟  
元日や晴て雀の  
ものかたり

丈草  
内藤氏  
俳人  
寶永元年(三三六)  
歿

燕村  
谷口氏  
俳人・畫家  
天明三年(四四三)  
歿

太祇  
炭氏  
俳人  
明和八年(四三三)  
歿

筆蹟  
はつ雪や雪駄な  
らして善光寺  
一茶

曉臺  
加藤氏  
俳人  
尾張藩士  
寛政四年(四三三)  
歿

一茶  
小林氏  
俳人  
文政十年(四二七)  
歿

月日は  
夫レ天地ハ萬物  
ノ逆旅ニシテ、  
光陰ハ百代ノ過  
客ナリ。(唐の  
李白、春夜桃李  
園ニ宴スル序)

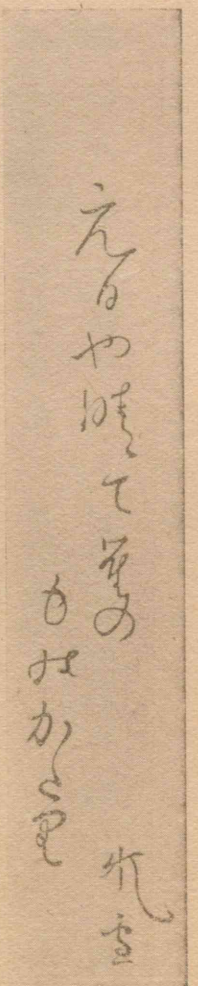
うごくとも見えて畑打つ男かな



嵐雪

筆來去井向

ぬれ縁や薺こぼるゝ土ながら  
黄菊白菊その外の名はなくもがな



丈草

筆雪嵐部服

時鳥なくや湖水のさゝにこり  
水底の岩におちつく木の葉かな  
春風や堤長うして家遠し

燕村

四五人に月落ちかゝる踊かな  
蕭條として石に日の入る枯野かな  
藪入の寝るや一人の親の側  
人心いくたび河豚を洗ひけん

太祇



筆茶一林小

九月盡はるかに能登の岬かな  
砂に埋む須磨の小家や冬の雨  
花の陰あかの他人はなかりけり  
はつゆきや俵の上の小行燈

曉臺

一茶



一〇 奥の細道

松尾芭蕉

出立

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上  
 に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にし  
 て旅を栖すまとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年  
 よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず。海濱にさすら  
 へ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春  
 立てる霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神のものにつきて心  
 を狂はせ、道祖神の招にあひて、取るもの手につかず、股引の破を  
 綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸するより、松島の月、先づ心に  
 懸りて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、  
 草の戸も住みかはる代ぞひなの家

去年 東山天皇の元祿元年(三語)

芭蕉四十五歳

江上の破屋 深川萬年橋北の芭蕉庵

門人杉風の別宅を譲りうけたもの

道祖神 さへのかみ

道を掌る神

三里

膝の下の外側及び内側の少しくぼんだところ

こゝに灸をすゑると足が達者になるといふ

杉風

鯉屋杉風 魚問屋 芭蕉の門人 享保十七年(三元)

別墅 年八十六

探茶庵



筆醒未杉小 蕉芭の途首

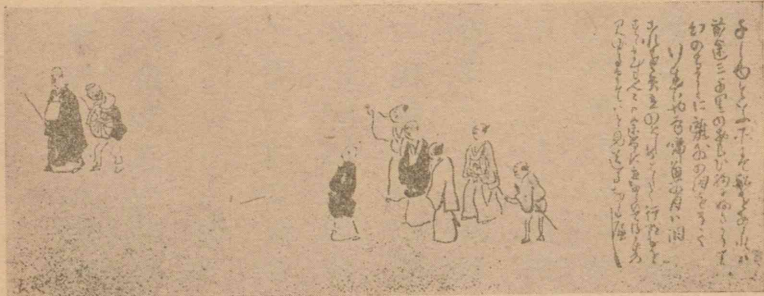


表八句  
百韻の連句で最  
初の八句をいふ

谷中  
上野の岡つゞき  
の地  
千住  
東京市足立區

平泉  
岩手縣磐井郡一  
關町の北九軒

表八句を庵の柱に懸置き、彌生も末の七  
日、曙の空朧々として、月は有明にて光を  
さまれるものから、富士の嶺幽かに見え  
て、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細  
し。陸まじきかぎり、宵より集ひて、舟  
に乗りて送る。千住といふ處にて船を  
あがれば、前途三千里の思、胸に塞がりて、  
幻の巷に離別の涙を濺ぐ。  
行く春や鳥啼き魚の目は涙  
これを矢立の始として行く道なほ進ま  
ず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆ  
るまではと見送るなるべし。



立 出  
筆 筆 村 燕 口 谷



十二日

東山天皇の元祿二年(三三〇)五月

石巻

宮城縣石巻市  
北上川の川口

黄金花咲く

すべろぎの御代

榮えむとあづま

なるみちのく山

に黄金花咲く

(大伴家持)

長沼

宮城縣登米郡新

田村にある新田

沼

戸伊摩

同郡登米町か

三代

藤原清衡・基衡・

秀衡

金雞山

秀衡が築いて平

泉の鎮護とした

山

平泉

十二日平泉と志し、姉齒の松緒絶の橋など聞傳へて人跡稀に雉兔芻蕘の往きかふ路そこともわかず、つひに路踏違へて石巻といふ港に出づ。「黄金花咲く」とよみて奉りたる金華山海上に見渡し、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立續きたり。「思ひがけずかゝる處にも來れるかな」と宿借らんとすれど、更に宿貸す人もなし。やうく貧しき小家に一夜を明かして、明くれば又知らぬ道迷ひゆく。袖の渡尾駁の牧眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間二十餘里程と覺ゆ。三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が墟は田野になりて、金雞山のみ形を遺す。まづ高館にのぼ

和泉

秀衡の三男和泉

三郎忠衡

國破れて

國破レテ山河在

リ、城春ニシテ

草木深シ。(唐の

杜市)

兼房

義經の郎黨増尾

七郎

白髪をふり亂し

奮闘して死んだ

年六十餘

曾良

河合氏

芭蕉の門人

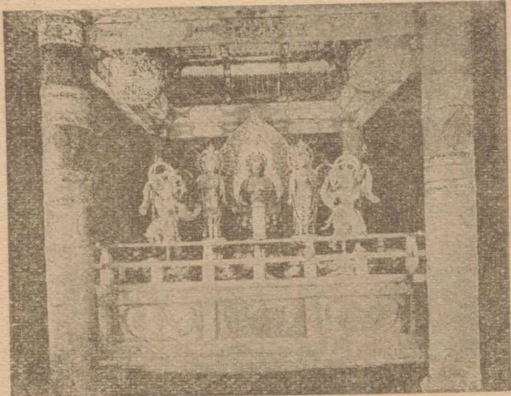
翁の奥羽行脚に

隨行した

寶永六年(一七二九)

段

年六十二



三尊佛

れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口を差固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷きて、時の移るまで涙を落しぬ。

曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の扉、風



立石寺

山形縣東村山郡  
山寺村にある天  
台宗の名刹  
山寺ともいふ

山形藩

山形藩  
當時は堀田正矩  
の領分であつた



慈覺大師

圓仁  
延曆寺第三世の  
座主  
貞觀六年(三三〇)  
寂  
年七十一  
尾花澤  
山形縣北村山郡  
尾花澤町  
雪の名所

に破れ、黄金の柱、霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚のくさむらとなるべきを、四面新に圍ひ、葺を覆うて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念となれり。

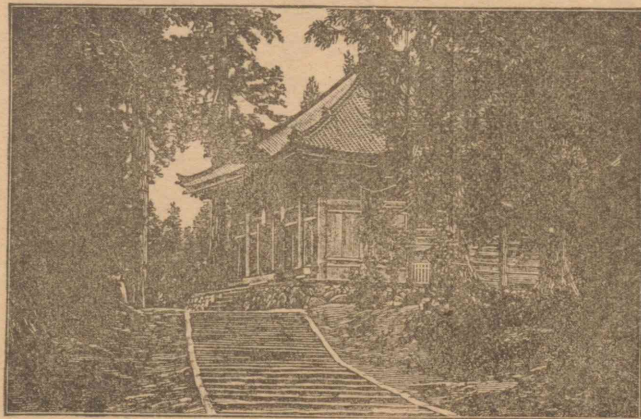
五月雨の降りのこしてや光堂

立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。

慈覺大師の閉基にて、殊に清閑の地なり。一見すべきよし人々の勸むるによつて、尾花澤より取つてかへす、その間七里ばかりなり。

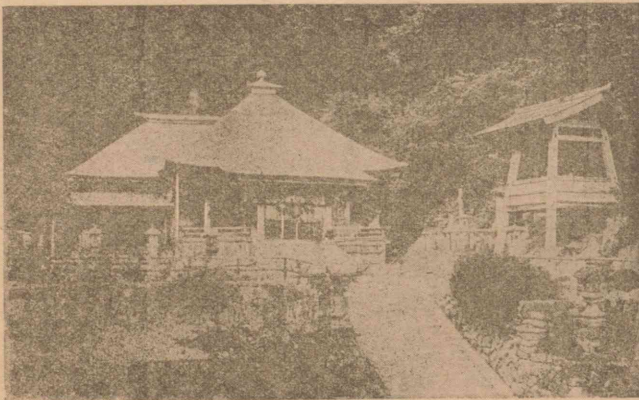
日いまだ暮れず。麓の坊に宿借りおきて、山上の堂にのぼる。



堂 光

卯の花山

富山縣礪波郡菰  
波村の南嶺  
俱利伽羅  
富山(越中)・石  
川(加賀)兩縣の  
堺の時  
何處  
姓未詳  
一笑  
小杉一笑  
高瀬梅盛の門人  
元祿元年(三四〇)  
没  
年三十六



立石

金澤

院々扉を閉ぢて物の音きこえず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心すみゆくのみ覺ゆ。閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

卯の花山・俱利伽羅が谷を越えて、金澤は七月中の五日なり。こゝに大阪より通ふ商人何處といふ者あり。それが旅宿を共にす。一笑といふものはこの道にすける名のほのく聞えて世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、その兄追善を



催すに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風 (奥の細道)

一 賴山陽

朝比奈知泉

賴山陽  
 名は襄  
 儒者・修史家  
 安藝(廣島縣)の  
 人  
 天保三年(西九〇)  
 卒  
 年五十三  
 贈從三位  
 朝比奈知泉  
 評論家  
 水戸の人  
 昭和十三年歿  
 年七十六  
 老博士  
 柴野栗山  
 名は邦彦  
 儒者  
 寛政三博士の一  
 人  
 文化四年(西六六)  
 卒  
 年七十四  
 贈從四位

「詩は別才なり」といひ、詩人は生る、成るにあらず。といふは、東西一般の金言なり。今山陽賴氏の一生を考ふるに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるなし。その童歳に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。その父母を懷ふに厚く、その皇室を懷ふに厚く、その忠臣義士を懷ふに厚く、天下國家を懷ふに厚く、情の熱するところ常に理の冷かなるに勝ちたるは詩なり。その北馬南船、行李卸さざるところなく、春花秋月、遊履遍からざるところなきは詩なり。その畛域

を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王侯に接するは詩なり。

山陽の性格言行、誰かこれを詩にあらずといはん。

試にその著作の史篇を視よ。政記の一書は固より多とするに足らず。外史何の取る所ぞ。その議論は平凡のみ、その事實は誤謬のみ、その體裁は偏失のみ。然れどもその筆墨の靈妙活動、殆ど天馬空を行く趣あり。敘事或は精、或は疎、或は長、或は短。精にして長なる時は、微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なるときは、或は脈々の餘情を含み、或は嫻々の餘韻を存す。戰爭を敘すれば讀者をして汗を握らしめ、別離を敘すれば讀者をして涙に咽ばしむ。而してその敘論のごとき、俯仰低回、感慨淋漓、まことに讀者をして一唱三歎せしむるものあり。

政記  
 ・日本政記  
 十六卷  
 神武天皇より後  
 陽成天皇に至る  
 百八代二千年間  
 の編年史  
 外史  
 日本外史  
 二十二卷  
 源平二氏より徳  
 川氏に至る武家  
 の歴史



此等の文字、此等の思想、果して如何なる天才より流出したるものぞ。その題目を擇ぶに源平以後の戦記を採りたるがごとき、その事實に於ては博引旁搜と明證確説とを主として、なほ讀者を了悟せしむるを務めず、専らその文章の靈動して讀者をして感激せしめんとしたるがごとき、特に皇室と忠臣とを思ふ情の切なるより正記を立つる標準一定ならずして、その體裁に前後の矛盾を來せるを顧みざりしがごとき、半生の精力を費して編述したる二十二卷の外史は、看來れば一篇無韻の敘事詩たるのみ。



頼山陽

試にその論策、文章を視よ。民政といひ、市糶といひ、水利といひ、邊防といひ、迂疎空濶にして實用に施すべからざるもの比々として皆これなれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり。而して外史以前の文章に就きてその精華を求むるに、その寸鐵人を殺すの妙、多くは小品の文字にあり。その形體は即ち論策たり、文章たり、その本質は即ち想像のみ、詩詞のみ。去りてその詩を見よ。雄健なるものあり、典雅なるものあり、適麗なるものあり、輕妙なるものあり。而してその最長を見るは歌行にあり、樂府にあり、料を史傳に取りてこれを詩詞に寓したるものあり。山陽亦自ら以て得意とし、余詠物を欲せず。詠物は詠史に若かず。史中無數の好題目あり。讀むに隨ひて淺



深皆眞詩を成すべし。これを舍てて雁字鶯梭を曰ふは爲す無  
 きなり。とはその平常の持論なりき。亦以てその才の日本の文  
 學を振ふに足りしを見るべきなり。余嘗てその戯に作れる今  
 様を読み、その跌宕飄逸自ら不群の趣あるに服し、思へらく、この  
 詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり。もし馳驟縱横、奇想を天  
 外に飛ばし、その事實に拘泥することなく演義述作する所あら  
 しめば、その造詣何ぞ唯李北地、嚴海珊にして止まんや。と。わが  
 史傳は未だ多く題詠に入らず。潛心好案を求め、研精妙句を探  
 り、その外史に灑ぎたる心血を傾倒してこれを詩賦に注がんか、  
 儼然たる敘事詩を作りてわが文學世界を風靡せんこと難から  
 ざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して固有の天才を萎  
 縮し、經濟の學に志を奪はれて専ら功力を詩に用ひざりしこと。

李北地  
 名は夢陽  
 明の詩人  
 嚴海珊  
 清の詩人

余が山陽の専ら詩人とならざりしを惜しむ理由頗る多し。今  
 少しくこれを擧げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、その  
 天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求  
 むべし。而して史傳を以て料とすることその卓識に發す。こ

暇嘗 船底御堂 湖天 洋中 未 櫻桃  
 太白一星 光如月 波石 照兄 毛魚 跳

れ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。而して尊王

の誠と忠臣義士を思ふ情とは、面に盡れて背に洩し。これ三  
 なり。而して余が特に表彰せざるべからざる第四の理由あり。  
 余曾て山陽先生行狀を読み、その常に曰く、我を才子なりといふ  
 は未だ我を悉さざる者なり。我を能く刻苦すといふ者は、眞に

筆蹟  
 眠驚キテ船底寒  
 湖響ク。天草洋  
 中夜機ヲ察ケ  
 太白一星光月ニ  
 似タリ。波間照  
 ラシ見ル巨魚ノ  
 跳ルヲ。

山陽先生行狀  
 山陽の門人江本  
 壽水の著



古賀穀堂

名は壽

佐賀藩の儒者

天保七年(二九六)

歿

年五十九

筆蹟

雲カ山カ吳カ越カ。水天勢弗青一。雲。萬里舟ヲ泊ス。天草ノ洋。煙ハ簾窓ニ横タハリテ日漸ク没ス。瞥見ス大魚ノ波間ニ跳ルヲ。太白船ニ當リテ明月ニ似タリ。

我を知れりといふに至り、竊にその實を失へるに非ざるかを訝りしが、後その詩稿を觀るに及び、苦心經營一句も苟もせざりし實迹を審にし、且古賀穀堂を訪ひ、初めその千言立成の敏才に驚きしが、數月を隔てて再び訪ひし時、その文稿の依然として改削

雲カ山カ吳カ越カ 水天勢弗青一 萬里泊舟 天草洋煙横簾窓 日漸没 瞥見大魚 波間跳ル 太白船 明月似タリ

頼山陽筆

する所なかりしを見て、茲に興し易しとの念を起したりといふ逸事を聞き、その意匠慘澹、勉勵刻苦の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐に景慕の情を催したり。蓋し創意の才は必ず刻苦の力と相待ちて後始めて絢爛の華彩を發すべし。余が山陽を惜

しむ第四の理由とするは、即ち斯の經營刻苦の氣力のみ。

又山陽が當時の儒者の如くに經義に耽り、章句訓詁の末を争ふ風なかりしは、頗るその才の發達に便なりしなるべしと雖も、かの經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては、山陽亦その常套を襲ふを免れず。つらく山陽の才幹を窺ふに、政治吏務はその長ずる所にあらざりしが如し。即ち早く自ら計をなし、區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はば、その成功何ぞ啻に今日の名聲に止らんや。人或は謂はん、山陽は外史を著して一世を鼓舞し、大いに尊王の精神を喚起して、遂に維新中興の遠因をなせり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんか、何ぞこの大功を奏するを得んと。嗚呼、これ詩を知らざる者の言のみ。詩の人心を感發するは、その勢力遙かに散文に過ぐ。



外史果して能く維新中興の遠因をなせりといはば、外史中の事實を敷衍してこれを詩にせるもの、亦豈その遠因となる能はざらんや。且外史の如きは、その文章如何に靈妙なりとも、今日の史學よりこれを視れば、小説と實録との間に横たはる一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては、決して完璧なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず。焉ぞ始めより純然たる詩篇を作るの勝れるに若かんや。柴野博士は山陽童時の詩を見て大いに嘆賞し、實材たらしむべし、詞人たらしむべからずとて、山陽の父春水に勸めて史を學ばしめたりといへり。博士の見、亦時流を脱せずといへども、その史を學ばしめたるは大いに可なり、その遂に修史の業に志すに至らしめたるは、余輩が山陽のため、に再四歎惜する所なり。(今世名家文鈔)

春水

頼惟完

安藝の儒者

文化十三年(三四)

乙辛

年七十一

贈從四位

萩原廣道

國學者

岡山の人

文久三年(三五)

歿

年四十九

天保の八年

仁孝天皇の御代

(二四七)

上の道の郡

岡山縣(備前國)

上道郡

龍口山

上道郡高島村湯

道の東北にある

小丘

六月の

富士のねに降り

おける雪は六月

の望に消ぬれば

その夜ふりけり

(萬葉集)

水蓼

かはたでもい

ふ



二三 水蓼

萩原廣道

天保の八年といふ年の夏のころ、世の中のはしたなきわたらひわざにつきて、上の道の郡なる龍口山の麓に日毎に通ふことありけり。まだきより起出でてつゝ、歸さはいつも晝すぐるほどなり。今日はおとに聞く駿河なる富士のねの雪だに消ゆといふ六月の望の日なれば、暑きことまた譬ふべくもあらぬに、いつもの如く起出でて、笠の紐結びなどするほどに、父君のたまふやう、この暑き日にさらされて、一里に餘れる道のほどを歸りこむには、忽ちにあしき氣を蒙りて、重き病も出て來なむを、蓼といふ草ぞ、さる氣を拂ふなると、昔より人もいひ、まことに驗あるものなれば、これ持ちて行けかしとて、御みづから門邊なる蓼のいさ



さかばかりほに出でたるを、よき程に摘みとらして賜ひしを、何ばかりの事とも思はざりしかど、唯みけしきあしからむと思へば、さる面持せて、袖にして出でゆきつ。

彼處のいとなみ果てて歸り來るに、この頃は日を経て雨降らず、

筆蹟  
立春日  
もろこしは猶冬  
ならし今そや  
わかひのもとに  
初日さすなる  
廣道

立春日  
もろこしは猶冬  
ならし今そや  
わかひのもとに  
初日さすなる  
廣道

筆蹟廣原萩

土さへさけて照續きたる天氣に、行手の道芝もしなえよられ、田のものにすだく蛙だに、こゝかしこの隈々に隠れて、息づきぬたる程なれば、暑きこといはむ方なし。小川の塘をたどりゆく程に、額の汗を拭ふとて、袖なる手拭をとうでけるにつきて、この賜ひつる夢の穂の、いたうしをれてぞ出できたる。思へばいと畏

かりけり。人の親の心ほど、世にもあはれに隈なく足らひたるものはあらず。たけだち人並になれる子の、はつかなる道の程をさへ、御心に深くかけてこの夢まで賜ひつる御心は、夜光らむ玉はものかは。いかならむ實位にもたぐふべきものはあらざるを、忝しとも思ひたらず、なか／＼老人のならひとさへに思ひあさみて、かくしなぶるまで忘れはてたる心こそは、あさましなどはおろかにて、我ながらいたういぶかしけれとさへ思ふに、涙はふれ落ちて、畏うもおほえければ、一つ／＼引きのして、あまたたびおしいたゞき、半ばを分ちて、ひたものうちくらひつゝ、かうぞ思ひつゞけたる。

夏の日のおつきめぐみを水夢のほと／＼忘れはつべかりけり



といふ時、涙更にさとほどばしり出づるに、道ゆく人の怪しとや  
思ふらむと、笠ゆりかたぶけておもてを隠しつゝ、なほつらく  
來し方を思ひつゞけゆくに、七つといひける年の秋、母君の世を  
去り給ひし後は、このひとところの御蔭にかくれて、數多の年月  
を思ひのまゝに人となりける、そのほどの御慈愛はいかばかり  
なりけむ。さるをつゆ報い奉らむとは思ひもかけず、水し女一  
人だにえつかはぬ家に住まへば、くたくしく苦しげなる家の  
内の事どもをさへ任せ奉りおきて、猶心ゆかぬ折々は、いかでか  
うはなどうちもつぶやき、性として酒のむことをこよなう好み  
給ふを、なま賢しげに諫め奉りなどしつるは、すべていかなるひ  
がひがしき心なりけむと、さまざまくやしうかきみだりて、現し  
心もなきまてにおぼゆ。

御野川  
旭川の支流

人のいたうのゝしり騒ぐ聲に心づきて見れば、早くも御野川の  
堤に來にけり。わたし舟待つほど、木陰にやすらひて眺めやれ  
ば、鱒といふ魚の、今年は殊に多かりとて、里人どもあつまりて  
網をひきつゝとらふるなりけり。常には珍らかなるものなれ  
ば、懐なりける錢残りなくとうでて、中に大きやかなるを買ひと  
りて、藁に包みてもて歸り來つれば、父君の待ちつけおはして、今  
日はいと早かりしよな、暑きに、勞れたらむを、憩へなど、例の如く  
のたまふにも、この長き日を只一人日毎に待ちつけ給ひぬるは、  
いかばかりわびしうおはしけむと思ふに、胸つとふたがるを、か  
らうじてまぎらはしつゝ、かの魚を取出で焼きもしつ、鱸にもし  
て、さてさゝげむと思ふ時、いかばかりうるはしき饗なりとも、酒  
なくてはと、常にのたまひしものと思ひいづるに、買ふべき錢



あらざれば、さらぬやうにて肆に出でゆき、單衣ひとぎぬひとつ賣りて聊かの酒を買ひとり、徳利にに入れて、さげてはせかへり、今日はしかじか、御野川にて鱒いとさはに取り侍りしほどに、珍らかにおぼゆるまゝに、買ひもて歸り、聊かなれど、酒さへに買ひおき侍るを、めし給ひなむや。といへば、珍らかなり、とくく。とのたまふまゝに、めしよせて、こはいかなる様してその里人はとらふるなど、いといたる笑みまけ給ひて、おもほす事もなげにのたまふにぞ、しかじかのわざしてとり侍るなどうち語らひつゝ、盃とうでて勸め參るうちにも、常にしもかくてあらむよしもがな。さいつ年惱ましうせさせ給ひたるけにや、御年のほどよりは、いたうくづをれ給ひて、いと弱うおはすなるものを、御心のまゝに楽しみ給はむ道も絶えはてたるこそ、いと畏く悲しけれ。人なみくく

の貧しさならば猶いかばかりもせむやうのありなむを、衰へはてたる家の内こそ悲しくも又くやしけれ。など思ふにも、魂きゆる心地して、ほれたるやうにてついゐたるを見そなはして、面持おもての常にしもあらざなるは、心地やなやましき。すぐして早う衰よかし。とて盃を賜ひつるに、今更のやうに胸ふたがりて、涙のおつるを、やうくく。にのどめて、何くれのをかしき物語などしつゝ、夕暮近うなりしかば、いたく酔ひ給ひにけむ。夕ゆふ食けめしながら、ころぶしつゝ、熟睡し給ひぬ。いと弱うなり給へりと見まつるにつけても、いはむ方なく苦しければ、蚊帳ひきめぐらして、抱き入れまゐらせ、そこら取拂ひなどするに、月の光涼しげに澄みわたりて、東のつま戸よりさし入るにぞ、すこしは心ものどまるやうにて。(竹柏漫筆)



近松門左衛門  
江戸時代の犬戯  
曲家  
享保九年(三二八)  
歿七十二

親子  
鄭芝龍とその子  
鄭成功

鄭芝龍  
明末の將  
嘗て我が國に來  
た時肥前平戸の  
田川氏の女を娶  
り成功を生んだ  
明の唐王を奉じ  
て清に抗したが  
戰利を失ふに及  
び妻の田川氏は  
自殺し芝龍は清  
に降つた

李昭天  
明朝に仕へて右  
軍の將となり後  
韃靼に内應して  
明帝を弑した

吳三桂  
明朝の忠臣  
仕へて司馬大將  
軍となつた

天啓五年  
明の熹宗の年號  
(三二五)

娘  
錦祥女

一三 千里が竹

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども、あとに擁護の神風  
や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地にも着  
きにけり。鄭芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に  
向ひ、わが本國といひながら、時移り代變り、天下悉く李昭天が引  
入れにて韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて誰を尋ねんやう  
もなく、司馬將軍吳三桂が生死のありかも知れざれば、何を以て  
義兵の旗を挙げ、何處を一城にたて籠るべき處もなし。然るに  
某去んぬる天啓五年、この國を立ちのき日本へ渡る時、二歳にな  
りし娘の子を乳母が袖に捨ておきしが、その子が母は産落して  
當座に死す。かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も  
知らぬ身が育てば育つ草木の雨露の恵に長ずることく、天地の

甘輝

明の將軍  
後韃靼に降つた  
が間もなく復こ  
れに叛いて鄭芝  
龍に應じた

和藤内

鄭成功

父芝龍が明の唐  
王を奉じて兵を  
擧げたとき王よ  
り朱姓を授けら  
れたので國姓爺  
と呼ばれた  
福州の戦が不利  
になつた時臺灣  
の蘭人を逐つて  
こゝを占有した

東坡

宋の蘇軾

文豪

建中靖國元年(二  
七二)卒  
年六十

父母の助にや、成人して今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻  
となるよし、商人の便りに聞及ぶ。頼む方はこればかり。親を  
慕ふ心あつて娘さへ承引せば、輝の甘輝も安々と頼まるべし。  
これより道の程百八十里、打連れては人も怪しまん。われ一人  
道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと頓智を  
以て人家に憩ひ、追ひつくべし。これより先は音に聞ゆる千里  
が竹とて虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江。これ  
猩々の栖む處。風景聳ゆる高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。  
それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて  
待揃へ、萬事を示しあはすべし。と、方角とでもしらす雲の日影を心  
覺えにて、東西へこそ別れけれ。

教に任せ、和藤内、人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、た



ほうど  
ほとくしの意  
我をぬかし  
氣抜けしの意か

ちやるめら  
葡萄牙語  
唐人笛

つきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、とび越えはね越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて浩々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうど我をぬかし、のう母ぢや人、この脚骨こつぼねに覺えたり、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふことか、行けば行くほど藪の中。んう、分つたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅まさば魅せ。宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯いの相伴ともと、根笹、大竹押分け、踏分け、尙奥深く行くさきに、怪しや、數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、喇叭、ちやるめら、高音をそらし、ひようくとこそ聞えけれ。「すは、我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなすわざか」と、惘然たるその折節、空凄じく風起り、沙を穿ち、どうくく、竹葉ざつと卷立てく、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもおろかなり。

虎嘯けば  
虎嘯ケバ風生  
起ル。(北史、  
張定和傳)  
楊香  
晋の人  
赤手で虎を捕つ  
て父の厄を救つ  
た

和藤内ちつとも臆せず、讀めたりく。さては異國の虎狩な。あの鉦太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が原。虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香やうかうは孝行の徳に因つて自然と逃れし悪虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇むわが勇力。唐へ渡つて力始め、神力ますく、日本力。刃で向ふは大人氣なし、虎はおろか、象でも鬼でも一搥うぎと、尻しひつからげ身繕ひ、母をかこうて立つたるは、西天さいてんの獅子王も畏れつべうぞ見えてける。案に違はず、吹く、風と共に暴れたる猛虎のからだ、節根せつねに頬ほを摩りつけ、摩りつけ、岩角に爪磨ぎたて、二人を目がけいがかみかゝるを事ともせず、弓手になぐり、馬手に受け、もぢつてかゝれば身をかはし、撓めばひらりと乗りうつり、上になり下になり、命競べ根



競べ、聲を力にえい／＼／＼、虎の怒り毛、怒り聲、山も崩る、如くなり。和藤内も大童虎も半分毛を筆られ、兩方共に息疲れ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、輔吹くが如くなり。

母藪陰より走り出で、やあく／＼和藤内、神國に生れて神より受けし身體、髮膚、畜類に出合ひ、力立てして怪我するな。日本の地は



和 藤 内

離るゝとも、神はわが身にいすゞ川、大神宮の御被、納受などか無からんや」と、肌はだの護符まもりを渡さるれば、げに尤も」と押戴き、虎に差向け、差上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛り



内 満 筆

に猛る勢も、忽ち尾を伏せ、耳を垂れ、じり／＼と四足を縮め、恐れ戦たたかき岩洞に匿れ入る尾筒を攫んで跳ねかへし、打伏せ／＼、ひるむ處を乗つかゝり、足下にしつかとふま

へしは、天の斑駒ふちこま、素戔すさ男尊の神力、天照らす神の威徳ぞ有難き。かゝる所に勢子の者群がり来るその中に、大將と覺しき者大音あげ、やあく／＼、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも主君右將軍李踏天より韃鞨王へ献上のため狩出したる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ばば打殺さん。しやぐわん、しやぐわん」とわめきけり。李踏天と聞くよりも願ふ所と笑

しやぐわん  
上官の訛で將士  
などの意か



壺に入り、やあ、餓鬼も人数、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本。風來とは舌長し。さほど欲しがらる虎ならば、主君と頼む李踏天とやら、石花菜とやら、こゝへ突出し詫言させい。ぢきに逢うて用もある。さもない内はいかなこと、ならぬ〜とねめつくる。「やあ、ものないはせそ。討取れ」と一度に劍をはらりと抜く。「心得たり」と護符を虎の首にかけ、母のそばに引据うれば、繋ぎし如くに動かず。「お、心易し」と太刀差鬚し、群がる中へ割つて入り、八方無盡に割りたて〜、撫てまくる。

勢子の大将安大人、官人引具し立歸り、おのれ老耄餘さじ」と一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加はつて、むつくと起きて身震ひし、敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛兎る。「こはかなはじ」と安大人、勢子の者が差いたる劍かり鉾、數鎗、手に

あたるを幸に、投附け〜打ちかくる。虎は神力自在を得、劍を宙に引つくは〜、岩に打當て、微塵になす。刃の光、玉散る霞水を碎くに異ならず。打物盡くれば、官人ども、色めき立つて逃げまどふ。後より和藤内、どつこい遣らぬ」と顯れ出で、安大人が素首を擱んで差上げ、くる〜と振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて亡せにける。

この勢に官人ばら、後へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突立つたり。「あ、申し御堪忍。御免々々」と手を合はせ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤内虎の背を撫で、うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に生長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を

平戸  
長崎縣北松浦郡  
平戸町  
松浦氏の居城で  
あつた  
和蘭との古い貿易港



報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方につけ。否いなといへば虎の餌食。否か、應おこか」と詰懸くる。「のう、何の否で御座りましよ。韃靼王に従ふも、李蹈天に従ふも命が惜しさ。向後きやくごお前の御家來ども。お情頼み奉る」と地に鼻つけて畏まる。「お、てかしたく。さりながら我が家來となるからは、日本流に月代さか剃つて元服させ、名も改めて召使はんと。差添の小刀外させ、これも當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやらこぼつやら。糸鬢厚鬢、剃刀次第。瞬く間に剃りしまひ、二櫛半のはらけ髪。頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合はせて、頭冷ひやつく風引いて、噫々いひいひ、村雨々々」と涙を流すぞ道理なる。親子どつと打笑ひ、揃そろひも揃そろうた供廻り、名も日本に改めて、何左

衛門、何兵衛、太郎、次郎、十郎まで、面々が國所頭字に名乗り、二行に立ててぼつたてろ。「承り候と、お先手の手振の衆、ちやぐちう左衛門、束蒲塞かばち、右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅しやん、太郎、占城ちやん、次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衛門、ぢやが太郎、兵衛、さんとめ八郎、英吉利兵衛、今參のお供先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を取る、口取る、國を取る、譽は異國、本朝に踏跨ふみこげたる鞍鏡、虎の背中に打乗つて威勢を千里に顯せり。(國性爺合戰)

一四 おのが物まなび

本居 宣長

おのれいときなかりしほどより、書を読むことをなむ、よろづよりもおもしろく思ひて讀みける。さるは、はかくしく師に就

本居宣長  
國學四大人の一  
伊勢國(三重縣)  
松阪生  
享和元年(1811)  
卒  
年七十二  
贈從三位



きて、わざと學問すにもあらず、なにと心ざすこともなく、その  
 すぢと定めたるかたもなく、たゞからのやまとのくさくさの  
 書のあるにまかせ得るにまかせて、古き近きをもいはず、なにく  
 れと讀みけるほどに、十七八なりしほどより歌よままほしく思  
 ふ心出で來て詠みはじめけるを、それはた師にしたがひて學べ  
 るにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとり詠み出づ  
 るばかりなりき。集どもも古き近きかれこれと見て、かたのご  
 とく今の世の詠みざまなりき。  
 かくて、はたちあまりなりしほど、學問しに、とて京になむのほり  
 ける。さるは十一のとし父に後れしにあはせて、江戸にありし  
 家のなりはひをさへに失ひしほどにて、母なりし人のおもむけ  
 にて、くすしのわざをならひ、またそのために、よのつねの儒學を

百人一首の改抄觀

三卷  
 百人一首を註釋したもの  
 釋契沖著  
 契沖  
 俗姓下川氏  
 難波(大阪)の國學者  
 元祿元年(1696)寂  
 年六十二  
 贈正四位  
 餘材抄  
 くはしくは古今集餘材抄  
 二十卷  
 古今和歌集を註釋したもの  
 勢語臆斷  
 五卷  
 伊勢物語を註釋したもの

もせむとてなりけり。

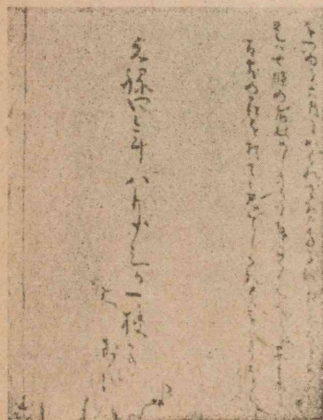
さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人に借りて見て、は  
 じめて契沖といひし人の説を知り、その世にすぐれたるほどを



契沖

も知りて、この人の著したるもの餘材抄勢語臆斷などをはじめ、その外もつきくにもとめいでて見けるほどに、すべて歌

なびの善き悪しきけぢめをも、やうやうにわきまへさとりつ。さるま  
 まに、今の世の歌よみの思へるむね  
 はおほかた心になはず、その歌の



契沖自筆の古今集餘材抄



國に歸りたり  
しころ

桃園天皇の寶曆  
七年(四七)

時に宣長は三十  
八歳であつた

冠辭考

十卷

賀茂眞淵著

枕詞を註釋した  
もの

縣居

賀茂眞淵の家の  
號

眞淵は遠江の人

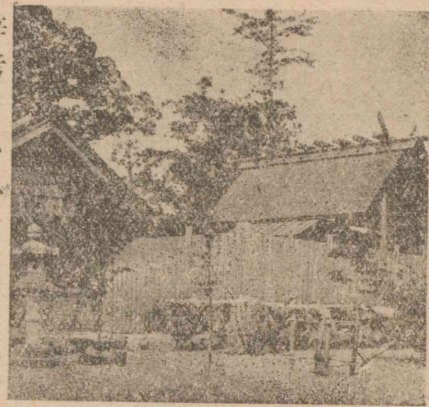
國學四大人の一

明和六年(四三)

卒

年七十三

贈從三位



さまざまをかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はな  
かりければ、たゞ世の人なみに、こゝかしこの會などにも出でま  
じらひつゝ詠みありきけり。さて人の詠むふりは、おのが心に  
はかなはざりけれども、おのがたてて  
詠むふりは、今の世のふりにも、そむか  
ねば、人は咎めずぞありける。そはさ  
社 神 山 室 山  
るべき理なり。別にいひてむ。

辭考といふものを見せたるにぞ、縣居あがたの大人おの御名をも始めて  
知りける。かくてその書はじめにひとわたり見しには、さらに  
思ひもかけぬことのみにして、あまり事遠くあやしきやうおほ

契沖が萬葉の  
說

契沖の著書なる  
萬葉代匠記に見  
えてゐる說

神書

神祇に關したこ  
とを記した書

えて、さらに信ずる心はあらざりしかど、なほあるやうあるべし  
と思ひて、立ちかへり今ひとたび見れば、まれ／＼にはげにさも  
やとおぼゆるふし／＼も出で来ければ、また立ちかへり見るに、  
いよく／＼げにと覺ゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の  
出で来つゝ、つひに古ぶりのこゝろことばのまことにさること  
をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の說  
は、なほ未だしきことのみぞ多かりける。おのが歌まなびのあ  
りしやう、おほかたかくの如くなりき。

さてまた道のまなびは、まづ初より神書といふすぢのもの、古き  
近き、これやかれやと讀みつるを、はたちばかりの程より、わきて  
心ざしありしかど、取りたててわざと學ぶことはなかりしに、京  
に上りては、わざとも學ばむと志は進みぬるを、かの契沖が歌書



ひととせ

桃園天皇の寶曆  
十一年(三三三)

時に眞淵は六十  
五歳

宣長は三十二歳

田安の殿

徳川宗武

吉宗の第三子

眞淵に就いて國  
學を學んだ

明和八年(三三三)

卒

年五十七

松阪の里

今の三重縣(伊

勢國)松阪市

宣長の生地



寶 茂 眞 淵 上 田 萬 年 歳

の説にならずらへて、皇國みくにの古の意こころをおもふに、世の神道者といふものの説く趣は皆いたく違へりと早くさとりぬれば、師と頼むべき人もなかりし程に、われいかで古のまことのむねを考へ出でむと思ふ心ざし深かりしにあはせて、かの冠辭考を得てかへすがへす讀み味はふほどに、いよ／＼こゝろざし深くなりつゝ、この大人を慕ふ心日にそへてせちなりしに、ひととせこの大人田安の殿のおほせごとを承りたまひて、この伊勢國より大和・山城などこゝかしこを尋ねめぐられしことのありしをり、この松阪の里にも二日三日とゞまりたまへりしを、さることつゆ知らで、後にきゝていみじ

く口惜しかりしを、かへるさまにもまた一夜やどり給へるを、うかゞひ待ちて、いと／＼嬉しく、急ぎやどりにまうでて、はじめて見え奉りたりき。さてつひに名簿みまづらひを奉りて教を承ることにはなりたりきかし。(玉勝間)

### 一五 江戸時代の文學

江戸時代二百五十年間は、文物の發達前古比なく、教學の感化殊に下層に及べるを以て、文藝の領域亦著しく擴張せられ、その題材形態に於て、その品類分量に於て、未だ曾て見ざる盛況を呈せり。即ち從來貴族・僧侶・武士等の手にありし文學は、こゝに至りて廣く一般庶民に開放せられたるなり。當代文藝の最大特質は、實にこの庶民階級の所産たる點に存す。而してこれが一面



の原因は庶民階級の勃興に存し、更にその素因は、彼等が漸次に占められる經濟的地歩に在りしことを忘るべからず。さはれ、是等文藝界を支配せる思想は儒教の精神なり。時により作品によりて、猶佛教を骨子とせるもの、或は儒佛二教の感化を受けたるもの、或は陽に三教一致を説けるもの、或は陰に心學の思想に據れるものあれども、當代文藝を一貫したる指導精神とし言はば儒教なること疑を容れじ。蓋し江戸幕府及び諸藩の獎勵せる學問は、専ら儒教なりしを以てなり。而して儒教の道義が既に前代より發達し來れる武士道の完成に寄與せしことの大なるは、また多言を要せず。更に武士道の精神が次第に庶民にも影響を及し、武士の道德律は終に當時の世道たる觀ありしことも見遁すべからず。例へば主從間の義理の如きは、町

人道としても重んぜられ、必ずしも武士のみの道德にあらざりしなり。随つて是等武士道、町人道の精神は、また文藝の上に反映して、小説・戯曲に描ける所、義理と人情との葛藤に關するもの極めて多し。要するに當代の文藝は、これを平安文學の主情主義なるに比すれば、意志の活動を強調して、勸善懲惡主義に傾きたるもの多く、これを鎌倉室町文學の神祕的・宗教的なるに較ぶれば、現實的・世俗的にして、嚴格なる階級制度の下にありながらも、猶且自由なる個性を描かんことを努めたり。勿論當代と雖も、保守的なる上流には依然として漢詩・和歌の類翫ばれ、これが下流の俳諧・狂歌と對せしは事實なり。而してその因襲的なる堂上の學風に抗して、古學復興の精神の擡頭せるは實に當代初期の事に屬す。



戸田茂睡

歌人

駿府(静岡市)生  
寶永三年(三六)

卒

年七十八

下河邊長流

國學者

大和國(奈良縣)

生

貞享三年(三六)

卒

年六十七

贈正五位

荷田春滿

國學四大人の一  
通稱羽倉齋宮

京都稻荷の神職  
元文元年(三六)

卒

年六十八

贈正四位

田安宗武

田安家の祖

徳川吉宗の第三

子

明和八年(四三)

卒

### 一 古學復興と歌道

古學は古代精神を究明せんとするものにして、國學と稱するも亦略同じ。先づ戸田茂睡、下河邊長流、釋契沖、荷田春滿等の古學は歌道に據れり。茂睡の功は梨本集などの著によりて堂上家の傳統歌學を打破したるにあり。長流は萬葉集の造詣深く、徳川光圀の爲にその註釋を企てたれど、果さずして卒せり。長流の莫逆の友契沖は、佛學の外に國學を善くす。その名著萬葉代匠記は、光圀の囑に依り、長流に對する友誼を全うせるものなり。契沖はこの他にも著書多く、國語學上の業績も亦少からず。春滿に至つては、營に歌道を主とせず、復古神道を唱へ、創學校啓を草し、國史律令を究む、以てその國學に對する熱意を窺ふべし。門下に賀茂眞淵あり。田安宗武に仕ふ。萬葉集を中心として

加藤千蔭

本名加藤又左衛門

江戸の國學者

文化五年(四六)

卒

年七十四

平田篤胤

國學四大人の一

秋田藩生

天保十三年(五〇)

卒

年六十八

贈正四位

小澤胤庵

京都の歌人

享和元年(四六)

卒

年七十九

上田秋成

大阪の國學者

文化六年(四九)

卒

年七十六

香川景樹

京都の歌人

天保十四年(五〇)

卒

年七十六

贈從五位

井手曙覽

越前(福井縣)福

井の歌人

明治六年(三五)

卒

古典を研究すると共に、克く萬葉調の雄健なる歌を詠ず。かの元祿期の復古的精神は、始めて眞淵の創作に表現せられたりと謂ふべし。その門下には多士濟々たり。歌文に於て最も名あるを加藤千蔭、村田春海とす。若しそれ國學全體に互りて究めざるなきは本居宣長なり。有名なる松阪一夜の會見は、長く師弟の契を結ばしめ、眞淵の古代研究の精神は、宣長によつて遺憾なく發揮せられたり。古事記傳の大著を始め、萬葉集、源氏物語等の註釋書、國語學上の諸著作、數ふるに勝ふべからず。我が國の古道即ち神ながらの道も、平安朝以來の「物のあはれ」といふ國文學精神も、實に宣長によりて闡明せられたり。宣長の著書に感激して國學に専念し、古道の講説に力めたるは平田篤胤なり。春滿、眞淵、宣長、篤胤を世に國學の四大人と稱す。



年五十七  
贈正五位  
良寛  
越後(新潟縣)の  
歌僧  
天保二年(三四九)  
寂  
年七十四  
大隈言道  
筑前(福岡縣)福  
岡の歌人  
明治元年(三三〇)  
歿  
年七十一  
宗鑑  
姓は山崎  
近江(滋賀縣)の  
人  
連歌師  
天文十二年(三三〇)  
歿  
年八十九  
守武  
姓は荒木田  
伊勢内宮の神官  
天文十八年(三三〇)  
歿  
年七十七  
松永貞徳  
京都の歌人・俳  
人  
承應二年(三五三)  
歿  
年八十三

尚、歌道に於て、宣長と略、時を同じうして京都に小澤蘆庵あり。初め堂上家に學び、後には清新獨得の境を開けり。蘆庵と親交ありし上田秋成は歌文に優れ、學者としてよりは寧ろ創作家としてその長を見る。その後京都の歌壇に重んぜられしは香川景樹なり。古今集を宗として歌道を一新す。この一派を桂園派と稱す。更に井手曙覽、釋良寛、大隈言道等各地に現れて、當代末期の歌界には新機運發動し、その歌風或は雄健に、或は純眞に、或は自由に、各、異彩を放てり。

### 二 俳諧文學

連歌に滑稽の想を託せるものを初期の俳諧とす。この種の俳諧は既に室町末期の宗鑑、守武に試みられたるが、當代に入りて益、隆盛となりぬ。松永貞徳は所謂古風俳諧の唱道者にして、種

### 西山宗因

俳人  
肥後加藤侯の侍臣  
後京都に住み大阪に移り更に江戸に下つた  
天和二年(三三三)  
歿  
年七十八

種の法式を設け、俗語を用ひて可笑味を詠ずることを主張したり。貞徳の俳諧がその法式に拘泥せるに對して、奔放なる破格的態度を執れるは西山宗因を祖とする談林派なり。談林俳諧は形式に内容に自由と清新とを獨得の生命として、營に俳壇のみならず、近世文學の各分野に謂はゆる近世的なるものを開拓せり。惜しむらくは未だ遊戲的氣分を脱せざりしを以て、その文學的評價は甚だ高からざるなり。談林より出でてその俳境を次第に進め、遂に斯道を完成せる者を松尾芭蕉とす。蓋し自然の懷に沈潜して、その閑寂の境に藝術的法悦を味ははんとするもの、これ蕉風俳諧の特質なり。固よりその多くの俳諧の中には、人事の興味を吟じたる所なきにあらざれども、畢竟芭蕉は自然詩人たり。しかもその品性高潔にして、門弟に對する情誼



極めて篤く、世間稀に見る人格者なりき。紀行としては甲子吟行奥の細道等殊に名高く、俳諧にては冬の日春の日ひさご等七部集と稱せらるゝものにその眞諦を窺ふべし。門人中、其角嵐



蕉門十哲  
其角嵐  
松村  
谷口  
吳  
蘇  
村  
筆

雪等特にすぐれたる十人を世に蕉門十哲と稱す。

なり。既に畫家として一家を成せる蕪村は、その心境を俳諧の上に吟じ出して、印象極めて鮮明なる句を残せり。又古典の教養に基づきて、史的聯想の豊なる句に富むも蕪村の特色なり。

元祿期の芭蕉に次いで俳諧に名高きは天明の谷口蕪村

横井也有

通稱彌左衛門

尾張藩の重臣

天明三年(一八四三)

歿

年八十二

蕪村と時代を同じくして更に多くの俳人を數ふべし。就中横井也有はその著鶉衣によつて俳才を知らる。炭太祇・加藤曉臺等また蕪村と共に俳諧の中興に盡くしたり。天明以後俳諧また擬はず、後期に至りては卑俗の調に陥りたれど、この間に唯一道の光明を放てるは俳諧寺一茶なり。一見滑稽を主とせるが如きも、その現實に即して人間愛に徹したる句境は他に見るべからず。

尙前句付より遊戯的に變化し、その内容著しく皮肉に走りたるものは川柳にして、自ら別種の興味を有す。狂歌はその源流を古今集の俳諧歌に求むべけれど、近世の俳諧と史的關係あるにあらず。されどその諧謔人の頤を解くに至りては川柳に近き所あり。共に天明頃より流行せり。



三 小説

當代の小説と稱するもの、その類極めて多し。先づ假名草子の類は室町期のお伽草子を承けて、題材を歴史・地理・古文學・佛書・漢籍に取り、平易なる假名文を以て、或は啓蒙的に或は娛樂的に一篇を構成せるもの、未だ文藝的趣味の芳醇をこゝに求むべからず。

次に出でたるは浮世草子の類にして、その代表作家を井原西鶴とす。西鶴は大阪の町人にして宗因門下の逸足なり。蓋し彼はその俳諧修業中に練磨したる觀察眼と表現力とを、こゝに遺憾なく發揮せるなり。即ちかの假名草子の因襲的・類型的なるとは全然創作態度を異にして、大膽に目前の實際的題材を捉へ、犀利なる筆法を以て文を行ふこと奔放自在、以て元祿の時勢粧

井原西鶴  
俳人・小説家  
大阪の人  
元祿六年(一六九一)  
政  
年五十二

八文字屋本  
京都の書賈八文字屋自笑が江島其積等に作らしめて出版した浮世草紙の稱  
山東京傳  
本名は岩瀬 颯  
讀本作者  
江戸の人  
文化十三年(一七二七)  
六政  
年五十六  
瀧澤馬琴  
名は解  
讀本作者  
江戸の人  
嘉永元年(一五八〇)



漫的なる讀本の類を擧ぐべし。上田秋成の雨月物語はその先

をさながらに活寫したり。その作品には、滔々たる現世謳歌の思想の裡に、一種道義の念と一脈無常の感との流るゝを感ずべし。かくて西鶴の出現は、行詰れる當時の小説界に新局面を打開せるのみならず、爾後の文藝史に永くその光芒を放てり。西鶴の後、その流を汲める作に八文字屋本と稱するものあれども、その觀察、その描寫、西鶴に比しては、いたく劣れり。



卒 年八十二  
贈從四位  
式亭三馬  
本名は菊池泰助  
滑稽本の作者  
江戸の人  
浮世風呂・浮世  
床を著す  
文政五年(一四八)  
歿  
年四十八  
十返舎一九  
本名は重田貞一  
滑稽本の作者  
江戸の人  
道中膝栗毛を著  
す  
天保二年(一四九)  
歿  
年六十七  
柳亭種彦  
本名高屋彦四郎  
草雙紙の作者  
江戸の人  
天保十三年(三三  
三)歿  
年六十

驅と稱せらる。その全盛期に至りては、山東京傳、瀧澤馬琴最も名あり。殊に馬琴はその代表作家にして、里見八犬傳の大著を始め、椿説弓張月その他傑作多し。概ね材を近古の歴史に取り、儒教的精神もてこれを料理し、勸善懲惡主義に據りて全篇を脚色す。しかもその雄篇大作各、渾然たる統一を保ち、讀者をして恰も坦々たる大道を濶歩する思あらしむ。讀本の外に、滑稽本、草雙紙等相前後して出で、式亭三馬、十返舎一九、柳亭種彦等、それぞれ作家として名高し。

四 淨瑠璃

淨瑠璃もその起源を室町時代に求むべく、現存最古の文獻として淨瑠璃十二段草子あり。淨瑠璃の名はこの曲に基づくと傳へらる。次いで當代の初、江戸に流行せる金平淨瑠璃といふは、

竹本義太夫

義太夫節の祖  
大阪の人  
正徳四年(一七二七)  
歿  
年六十四



人形性國  
形御爺  
前軍談

曲節極めて勇壯活潑、大いに殺伐なる當時の好尚に適ひしが、藝術的價値はさほど大ならざりき。これをして最も重要なる當代の一藝術たらしめたるは、大阪に於ける近松門左衛門と竹本義太夫との力衛門なり。義太夫の功はその曲節の上に存し、近松の績はその詞章の上に在り。抑、義太夫は耳に三絃と肉

聲との美しきを聴き、眼にそれに伴ふ人形の活劇を併せ觀るに非ざれば、未だその獨得の眞味を賞すべからず。されど、その詞章のみを繙讀するも、猶善く當時の義理を談じ、人情を敘する



紀海音  
通稱鯛屋善八  
 浄瑠璃作者  
 大阪の人  
 寛保二年(1742)  
 歿年八十

ところに、我が國民精神の心ゆくまで發揮せられたるを感得すべく、又その章句の雅俗巧みに調和せられて、圓轉自在、他に比すべからざる妙趣あるを掬すべし。殊に近松に於ては、博識宏聞、和漢儒佛に出入し、古今上下に互りて各種の題材を捉へ、天馬空を行くが如き想像を馳せて多くの時代物、世話物を作れり。有名なる國性爺合戦、曾我會稽山の如きは時代物に屬す。その趣向を興味中心に仕立てたるため、實感味の稀薄なる節もあれど、義理と人情との葛藤を描ける悲劇的場面に至りては、何れの作にありても觀衆の熱涙を絞らしむ。要するに紛々たる人生の事實を美化して、所謂虚實皮膜の藝術論を作品に示したるは、實に近松の偉大なる藝術家たる所以なり。近松と同時代の作家に紀海音あり。名聲近松に壓せられたれども、その伎倆決して

竹田出雲  
浄瑠璃作家  
 大阪の人  
 寶曆六年(1756)  
 歿年六十六

化政度  
光格天皇の文化  
 (一四四一—一四七七)時  
 代及び仁孝天皇  
 の文政(一四七一一  
 四九)時代

鶴屋南北  
脚本作家  
 四代鶴屋南北は  
 本名耕屋伊之助  
 文政十二年(一四  
 二九)歿

河竹黙阿彌  
本名は青村芳三  
 郎  
 江戸の人  
 明治二十六年(一  
 三九五)歿  
 年七十八

凡ならず、彼は人情を主としたるに、此は義理を重んじたりと稱せらる。やゝ後に竹田出雲あり、場面變化ありて脚色の複雑なるを特色とす。菅原傳授手習鑑、假名手本忠臣藏等、最も著名なり。出雲の後、浄瑠璃は次第に衰へたれども、今日實演せらるゝものには却つて後世の作多し。浄瑠璃と同時に、演劇に用ふる脚本も亦夙くより現れ、近松にもその作多けれども、その盛になりたるは當代中期以後のことなり。更に化政度に於ける鶴屋南北は第一の作者と稱せられ、その門流に出でたる河竹黙阿彌は當代末期を飾る大家たり。但し是等作家の手に成れる脚本は、劇文學としては、未だ浄瑠璃文學の如く一般に親しまれざるが如し。

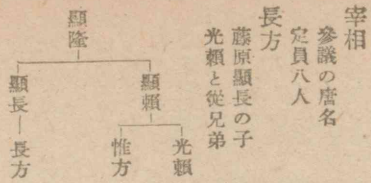


一六、光頼卿の参内

十九日  
 二條天皇の平治元年(八七)十二月十九日  
 光頼  
 藤原顯頼の子  
 世に桂大納言といふ  
 信頼は光頼の甥  
 信頼  
 藤原忠隆の子  
 源義朝と結びて平治の亂を醸し事成らずして三修禱に斬られた

さる程に、内裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不参にておはしましけるが、参内して承らんとて、殊に鮮かに束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀おとなしやかに佩きたまひ、めのと子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色（雑色）の装束に出でた、せ、自然の事もあらば人手にかな、汝が手にかけて、光頼が首をば急ぎ取れ、とて御身近く置き、その外、清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて處々門々を堅く守護しけるを事ともせず、さき高らかに追はせて入りたまへば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通したてまつる。

紫宸殿の後を経て殿上を廻りて見たまへば、信頼卿一座して、そ

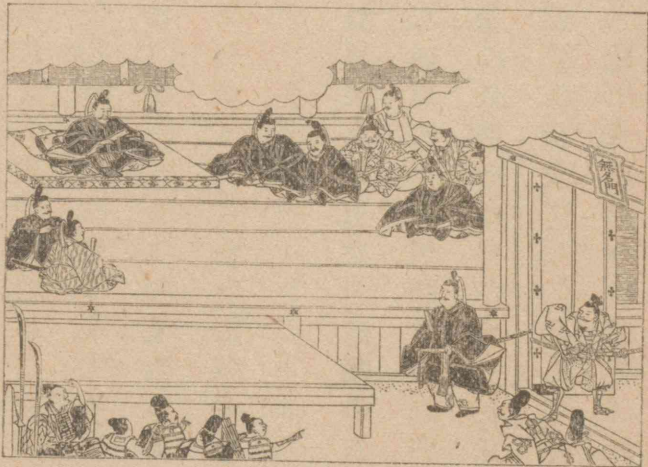


の座の上、藤たち皆下にぞ着かれける。光頼卿、こは不思議のことかな。人はいかに振舞ふとも、かれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には着くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ、と色代して、しづくと歩み、信頼卿の座上にむざと着きたまふ。

光頼卿は信頼卿のためには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿、あなあさまし、と見たまふに、光頼卿下襲（したかき）の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候。召に参ぜざらん者をば死罪に行はるべしとやらん承りて参内するところなり。抑、何事の

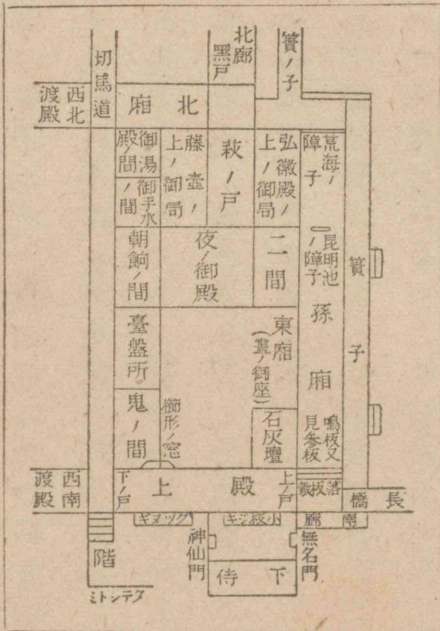


御詫ぞ。と問ひけれども、信頼卿物も宜はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿ついで、立ちて、悪しう参つて候ひけり。とて、しづくくと歩み出でられけり。庭上に充滿ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕したまひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。



光頼卿の参内 平治物語圖會

頼光  
源満仲の子  
東宮大進  
治安元年(一六一)  
卒  
頼信  
頼光の弟  
鎮守將軍  
永承三年(一〇七八)  
卒  
年八十一



あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼しからん。と申せば、傍なるものの、昔頼光頼信とて源氏の名將おはしましき、その頼光を打返して光頼と名のり給へば、これも剛にましま

すぞかじ。といへば、また傍より、などその頼信を打返して信頼と殿はあれほど臆病にはおはしますぞ。といへば、壁に耳、天に口といふことあり、恐し、恐し。口かじ。といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。



惟方  
左兵衛督檢非違  
使別當藤原惟方

少納言入道  
少納言藤原通憲  
入道信西  
神樂岡

京都洛東吉田の  
東新黒谷の西に  
ある小丘

光頼卿かやうに振舞ひたまへども、急ぎでも出でられず、殿上の小藪こさくの前、見參の板高らかに踏みならして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩戸の邊に弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ、宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、参じたれども、承り定めたることもなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承るときは、その人皆當時の有職、然るべき人どもなり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さても先日、右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向はれけることはいかに。以ての外、然るべからざる振舞かな。近衛大將、檢非違使、別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗りたまふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず」と宣へ

勸修寺内大臣

藤原高藤

三條右大臣

高藤の子定方

延喜の聖代

醍醐天皇の御代

(美一)天三

英雄

公卿の資格の名

又清華ともいふ

三公・太政大臣・

大將にはなれる

が攝政・關白を

兼ねることは出

來ぬ

大貳清盛

太宰大貳平清盛

切目

和歌山縣日高郡

切目村

ば、別當、それは天氣にて候ひしかば、とて赤面せられけり。光頼卿重ねて、こはいかに、勅詔なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは皆これ徳政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なつて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで人にさしもどかるゝほどの事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せのぼるなるが、和泉紀伊伊賀伊勢の家人等接待けて大勢にてあなる。信頼卿が語らふところの兵そこばくならじ。平家大勢押寄せて攻めんには、時刻をやめぐらすべき。



一本御書所  
内裏東門建春  
門の内にあつた  
内侍所  
神鏡  
温明殿  
紫宸殿の東

もし又火などをかけなば、君もいかてか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかにいはんや君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申しあはすとこそ聞ゆれ。相構へてく隙を窺ひ、玉體恙なくおはします様に思案せらるべし。さて主上はいづこにおはしますぞ。黒戸御所に。上皇は。一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劍璽はいづこに。夜の大殿に。と左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

又、朝餉あさかじの方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方様の女房などぞかけろひ候らん。と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今かくござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し参らせたり。末代なれども、さすがに日月は未だ地に墜ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をいかゞ守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝にて未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。とて、のろくしげに憚る所なく、どき給へば、惟方は、人もや聞くらん。とよにすさまじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、「われいかなる宿業によつてかゝる世に生れあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼卿の座上に着かせられし時は、さしもゆゆしく見えたまひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出でた

許由  
堯が位を禪らう  
といつたので汚  
れた事を聞いた  
とて耳を颯川の  
水で洗つたとい  
ふ高士



まひける。(平治物語)

一七 人臣の道

北畠親房

北畠親房  
吉野朝の忠臣  
大納言  
從一位准三后  
正平九年(1154)  
卒  
年六十二  
贈正一位

前車の轍  
前車ノ覆ルハ後  
車ノ戒。(史記)

凡そ王土にうまれて、忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、その跡を感みて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして過分の望をいたすこと、自ら危むるはしなれど、前車の轍を見ることは、誠に有りがたき習なりけむかし。

中古までは人のさのみ豪強なるをば誠められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふ例あれば、誠めらるゝも理なり。鳥羽天皇の御代にや、諸國の武士の源平の

家に屬することを禁むべし。といふ制符度々ありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて諸國の兵を召具しけるに、近代となりて、やがて肩を入るゝ族多くなりしによりて、この制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、いふかひなきことになりけり。

このころの諺には、一度軍にかけあひ、或は家子、郎從節に死ぬる類あれば、わが功におきては日本國を賜へ。もしは半國を賜はりても足るべからずなど申すめる。誠にさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、又朝威の輕々しさも推測らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり」といへり。あからさまにも君をないがしろにし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊

言語は君子の  
樞機なり  
言行ハ君子ノ樞  
機ナリ。(易經)  
堅き氷は  
霜ヲ履ミテ堅氷  
至ル。(易經)



子といふものは、その始、心言葉を慎まざるより出で来るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにも非ず、草木の色の

改るにも非ず、人の心の悪しくなり行くを、末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟六腑のかはれるにはあらじ、能く思ひならはせる故にこそあらめ。猶行末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。おほかたおのれ一身は恩に誇るとも、萬人の恨を遺すべきことをばなどか願み



北 昌 親 房  
先 進 緒 像 玉 石 雜 誌

巢父  
孔巢父  
許由と曰じ時代の隱者  
五臟  
心・肝・腎・脾・脾  
六腑  
大腸・小腸・膽・胃・三焦・膀胱

將門  
平將門  
漢の高祖

姓名劉

前漢の第一世

高祖の師

今三寸ノ舌ヲ以

テ帝者ノ師トナ

リ、萬戸ニ封ゼ

ラレテ諸侯ニ列

ス。是布衣ノ極

ニシテ、良ニ於

テ足レリ。(史記、張良の語)

籌を帷帳の

高祖曰ク、夫レ

籌ヲ帷帳ノ中ニ

運ラシ、勝ツコ

トヲ千里ノ外ニ

決スルハ、吾子

ざらむ。

君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に分たせたまはんことは、推しても測り奉るべし。若し一國づつ望むならば、六十六人にて塞がりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬の人は悦ばじ。況や日本の半ばを志し、みなから望まば、帝王は何處を知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で、面に恥づる色のなきを謀反のはじめといふべきなり。昔の將門は、比叡山に登りて大内を遠見して、謀反を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけむ。昔は人の正しくて、自ら將門に見も懲り聞きも懲り侍りけむ。今は人々の心かくのみなりにたれば、この世はよく衰へたるにや。



房如カズ史記  
子房は張良の字  
筆蹟

七夕同詠七夕契  
久 和歌

大納言源親房  
雲のうへに千年  
のあきをかそふ  
れは契もひさし  
ほしあひのそら

留

交那の河南有開  
封府陳留縣

文治の頃

後鳥羽天皇の文  
治五年(一一七三)

泰衡

藤原泰衡

平重忠

畠山次郎重忠

長岡の郡

吾妻鏡には葛岡

今郡の宮城縣(陸

前國)玉造郡葛

岡

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり、これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖

七夕同詠七夕契久

和歌

大納言源親房

雲のうへに小千年れ

あさびやあさふれ

契もむひさしあひ

ほしあひ

北 島 親 房 筆

の師として、籌を帷帳の中にめぐらし、勝つことを千里の外に決するは、この人なり。と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる處を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、自ら向ふことありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の

直實

熊谷次郎

中一年

元弘三年(一一三三)

後醍醐天皇隱岐

より還幸

建武元年(一一七四)

天下一統

建武二年(一一七五)

北條時行亂を起す

郡とて極めたる小さき處を望みて、賜はりけるとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめむがためにや。賢かりけるをのこにこそ。また直實といひけるものに一所を與へ給ふ下文に、日本第一の剛の者なり。と書きて賜ひてけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞の甚だしきに、與へたる處の少き、誠に名を重くして利を軽くしけり、いみじき事と口々にほめあへりける。いかに心得てほめけむと、いとをかし。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君を落し奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀もかはりはてぬ、公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍る輩もありと聞えしかど、中一年ばかりは、誠に一統のしるし覺えて、天下下舉り集りて、都の中はえん、しくこそ侍りけれ。(神皇正統記)



大西 祝

哲學者  
文學博士  
東京專門學校講  
師  
京都帝國大學文  
科大學講師  
岡山生

明治三十二年二  
月卒

年三十六  
アリストートル

希臘の大哲學者  
(西曆前三四一前  
三三三)

ソロモン

富と榮華と智慧  
とに名高いイス  
ラエル王

(西曆前九三〇前  
九一〇)

箴言  
舊約全書の中の  
一書

一八 俚諺論

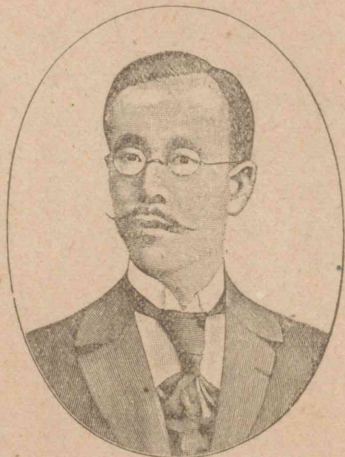
大西 祝

世に聖賢と稱せられ大詩人と呼ばれる、ものの俚諺を好み用ひたるは、その例に乏しからず。アリストートルも希臘の俚諺を集めんとせしことありき。ソロモンの箴言といふも、もとこれ往古のイスラエル人民の俚諺を蒐めたるものに外ならず。一國民の言ひなれたる俚諺の内容を深く研究すれば、その國民の歴史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度等、その一切の生活とそ生活の理想とに就いて發見する所多々あるべし。「花は櫻木、人は武士」といふ美しき諺は言ふも更なり、武士は食はねど高楊枝、武士は相見互、といふが如きは、我が國の歴史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又これによりて、か

イスラエル  
古代猶太

貞女は兩夫に見  
えず

王嬭曰ク、忠臣  
ハ二君ニ事ヘ  
ズ、貞女ハ二夫  
ニ見エズ。(史記)



大西 祝

かる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ」といふを見れば、千萬言の歴史的敘述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふ者の勢力の如何なりしかを察知し得べく、女に家なし、貞女は兩夫に見えず」といふなどは、我が國に固有なる諺といふべからざれども、亦以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、嫁が姑になる、老いては子に従へ」といへば、我が國の家族制度を示すところあり。「さはらぬ神に崇なし、棄てる神あれば助ける神あり、神は正直の頭にやどる、苦しい時の神だのみ」などは、宗教思想を示すべく、袖



ふり合ふも他生の縁」といへば、以て佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。

歐洲諸國の諺には夫婦の關係を言へるもの甚だ多けれども、我が國にては寧ろ親子の關係を言へるもの多きが如し。「親の心、子知らず」子を知るもの親に如くはなし、「子ゆゑの間に迷ふ」孝行をしたい時分に親はなし、かはいゝ子には旅をさせよ、「子は三界の首枷」子が思ふよりは、親は百倍も思ふといふなど、親の慈をいふや至れり、盡くせり。その上に子よりも孫はかはいゝといへる、何の言かこれにまさりて孫の愛の濃やかなることを發表するものぞ。かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺はまた能く人情の他面をいふ。「子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪なし」とは、よくも吾人の主我心を言察てるものかな。

三界  
欲界  
色界  
無色界

一般の人情に自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而してその中に如何によく普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「下さるものは夏も御小袖、かたきの家にて口をぬらせ、ころんでも唯は起きぬ」泣く子も目を見る。まことに然り、泣く子すら自身を護るには油斷せざるなり。「油斷大敵、小を棄てて大に就け」長いものには卷かれよ、曲らねば世に立たれず、など、何れか利益の念を主とせざる。聖人は「知らざるを知らずとせよ」といひ、俚諺は「知つて知らざれ」といふ。「鷹は死しても穂をつまず」など、氣概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は「賢かれ、損をすな」といふにあり。俚諺は事の一面を見てこれを誇張して言ふ傾あるものから、そ

知らざるを  
子曰ク、由、女ニ  
之ヲ知ルヲ誨ヘ  
ンカ。之ヲ知ル  
ヲ之ヲ知ルトナ  
シ、知ラザルヲ  
知ラズトセヨ、  
コレ知ルナリ。  
(論語、爲政篇)



の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見その判断の相反するが如く思はるゝものあれど、かく両面よりいふところよく世態人情の實相にかなひて、その判断概ね公平なり。「すきこそ物の上手なれ」といへど、「下手の横ずき」といふを忘れず、親に似ぬ子は鬼子」といへば、形は生めど心は生まぬ」といふ。かく事の両面を叩いて世相の内秘、人情の裏面を穿たんと力むる、これ即ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を許きて、巧に罵倒し了するものあり。

我が國の俚諺は、他國の俚諺に比してその性質及び價值如何。これらの問題を考へんには、先づ以て我が國の俚諺を採集せざるべからず。予輩は早く適當なる準備を以て、この事に着手するもの出で來らんことを切望せざるを得ず。(大西博士全集)

兼好法師

俗名吉田兼好  
吉野朝の文學者  
正平五年(1170)  
寂

年六十九

物のあはれ

春はたゞ花のひ  
とへにさくばか  
りものあはれ  
は秋ぞまされる  
(拾遺集)

花橘

さ月待つ花橘の  
香をかげば昔の  
人の袖の香ぞす  
る(古今集)

一九 四時のあはれ

兼好法師

折節の遷り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ」と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひときは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう／＼けしきだつほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわた／＼しう散過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづに唯心をのみぞ悩ます。花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへの事も立返り戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなき様したる、すべて思ひすてがたきこと多し。



祭

賀茂の祭  
四月の中の酉の日  
今は五月十五日

「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、菖蒲草く頃、早苗とる頃、水雞の叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月、被またをかし。棚機祭るこそなまめかしけれ。やうく夜寒になる程、雁鳴きて来る頃、萩の下葉色づく程、早稲田刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言ひつゝくれば、皆源氏物語枕草



佛 灌  
英一蝶筆 東京室博物館藏

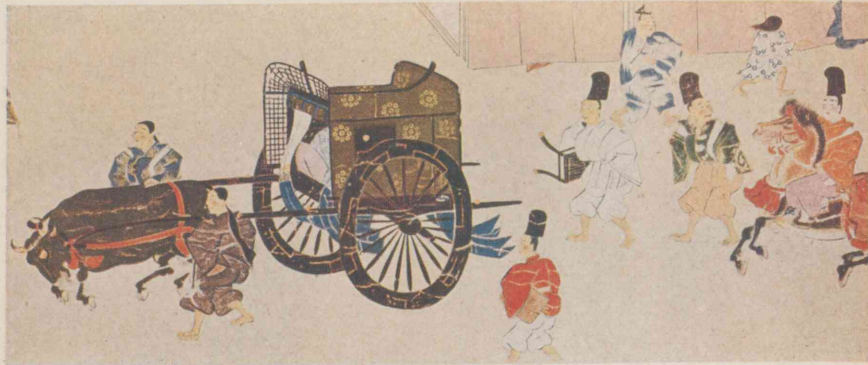
おぼしき事  
おぼしき事は  
ぬはげにぞ腹ふ  
くるゝこゝちし  
ける(大鏡)

御佛名

十二月十九日か  
ら三日間宮中で  
僧侶に佛名經を  
誦ませる佛名會  
荷前の使  
諸國よりの貢物  
の初穂を年末に  
十陵八墓に獻じ  
たまふための御  
使

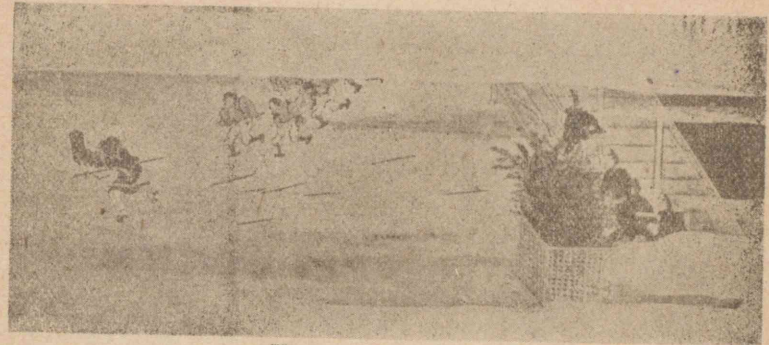
子などに事ふりにたれど、同じ事また今更に言はじともあら  
ず。おぼしき事言はぬは腹ふくるゝ業なれば、筆に任せつゝ、あ  
ぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべ  
きにあらず。さて、冬枯の景色こそ、秋にはをさくゝ劣るまじけれ。汀の草に  
紅葉の散りとままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の  
立つこそをかしけれ。年の暮れはてて人毎に急ぎあへる頃ぞ、  
またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月  
の寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛  
名荷前の使立つなどぞ、あはれにやむごとなき。公事ども繁く、  
春のいそぎに取重ねて催しおこなはるゝ様ぞいみじきや。追  
離より四方拜に續くこそ面白けれ。つごもりの夜いたう暗き





筆言訥中田

祭茂賀



道 冷 泉 爲 恭 筆 礎

に、松どもともして、夜半過ぐるまで人の  
 門叩き走りありきて、何事にかあらむ、事  
 事しくのゝしりて、足を空にまどふが、曉  
 方よりさすがに音なくなりぬること、年  
 の名残も心細けれ。亡き人の來る夜と  
 て魂祭るわざは、この頃都には無きを、あ  
 恭づまの方にはなほすることにてありし  
 こそあはれなりしか。

かくて、明けゆく空の景色、昨日に變りた  
 りとは見えねど、引きかへめづらしきこ  
 こちぞする。大路のさま、松立てわたし  
 て華やかに嬉しげなるこそ、またあはれ



なれ。(徒然草)

## 二〇 民謡

島木 赤彦

島木 赤彦

本名久保田俊彦

歌人

長野縣生

大正十五年歿

年五十

萬葉集時代

大體飛鳥・藤原・

奈良時代をいふ

勅撰集時代

平安朝より鎌倉

時代まで

日本民族には、太古から日常の感情を歌謡にうつして自ら口に歌ひ、且又對者と唱和するといふ風があつた。それらの民謡は萬葉集時代、勅撰集時代を経て足利・徳川の各時代に及び、順次に發達推移して今日に及んだ。

然らば、それらの民謡の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産出したところの、惻惻として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の歌謡には、暢氣に似て、その底には重々しい調子がこもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊の遺瀨ない哀音がこもつてゐる。



乳が崎  
伊豆大島の東北  
の岬

浅間

長野・群馬の兩  
縣に跨る活火山  
標高二五四二米

碓氷

上野國(群馬縣)  
より信濃國(長  
野縣)に越える  
中仙道の峠  
海拔九五八米

追分

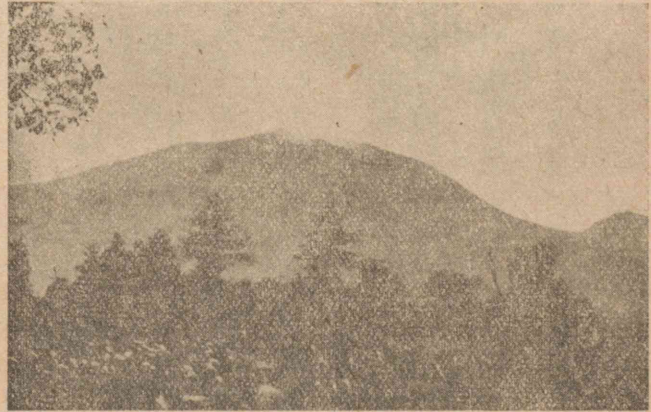
長野縣北佐久郡  
西長倉村追分

坂本  
群馬縣碓氷郡坂  
本町

輕井澤  
長野縣北佐久郡  
東長倉村  
淺間山の東南麓

乳が崎沖まで見送りましょがそれから先は神頼み  
といふ伊豆大島の唄の如き、必ずし  
も船唄とばかりは言へぬが、海中の  
孤島に頼りなく住む人々の心理が  
「神頼み」の哀音となつてあらはれて  
ゐるその純粹さを味はふべきであ  
る。

浅間の煙が北へと靡く今宵泊ら  
にや雨になる  
一誦して、浅間の山裾から碓氷越を  
して北國街道を往來する馬子の唄  
であることがわかるではないか。浅間の裾野には追分の宿場



山 間 淺

があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の  
旅人の一夜の泊場であつた。その宿引が旅人を呼びとめて  
一宿を勧める心が、この歌の心である。一夜の宿を勧める歌謠  
を、勧められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて  
慰めてゐるところが、哀な漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を  
鳴らして上るは碓氷の坂、下るは輕井澤・追分の曠野である。見  
上げる空にはいつも浅間の煙が靡いてゐる。煙は高く南へ靡  
く。風が北になれば、日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和  
は雨となる。「今宵泊らにや雨になる」は、この嶮坂を上下する脚  
絆草鞋の身にとつては、決して戯れの問題ではないのである。  
麥ついて夜麥ついてお手にまめが九つ九つのもめを見れば  
親里がこひしや



人麿  
柿本人麿  
藤原朝の歌聖  
貫之

紀貫之  
平安朝の歌人  
古今集撰者の一  
人  
天慶九年(二六六)  
卒  
年六十五  
贈従二位

麥をつくのは農家の新婦である。嫁して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいと々落ちつかぬ心がある。父母の愛に、娘として掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をついて掌に出来たまめを眺めて親里を思ふ痛切さは、恐らく人麿貫之の秀歌にも優るものがあらう。

これらの唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。さうして、民謡としての生命も全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を表す民謡ほど、それがまた地方的個性を表現してゐると言得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くとも土の個性を離れることは出来ない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄

はれた民謡に強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が島に生れ、浅間の煙の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生れ、麥ついで「の唄が伊豆南方の田舎に生れてゐる事を考へ合はせると、民謡と地方との關係を略推測することが出来よう。たゞ民謡の優れたものは、それが口移しに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少くない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れては行はれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れて來る。例へば、麥ついで「の歌は、甲斐の南方では、

大麥ついで麥ついでお手にまめを九つ九つのまめを見れば  
親の在所こひしよ



と唄つてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味ははれる。

この苗をとりあげてどこに棲まらずやいなごやきりすゝきすき葦のこやのうらに棲まらずや、

これは伊豆の南方の稻生澤村の苗取唄である。思ふにこの歌謠は決して近代のものではない。少くとも平安朝時代か、或はそれ以前に生れたものが、その優れた秀でた調子を持つがために、南方の邊土に、今日まで轉訛しながらも、その生命を保つてゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充滿ちてゐる。この美しい心情を持った民謡が今日の日本に残つてゐて、現在もなほ農夫の口に歌はれてゐることは、我が日本民族の誇とするに足ると思ふ。

稻生澤村  
靜岡縣伊豆國賀  
茂郡稻生澤村  
下田町の附近



八ヶ嶽

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つた芒や結きあんだ葦の小屋の中に、自分と一緒に住まないか。」

といふその心は、なんとといふ單純な、同情の籠つた、愛に滿ちた心であらう。

自然の中に、愛に包まれて、その日の労働をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。「この苗を取りあげては、原作は勿論、この稻を刈りあげてであつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも残つて



あるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越し三の坂越しや強清水こほりみづ

これは信濃國の民謡中出色の一である。草刈馬に乗つて八ヶ嶽の裾野を上る。一の坂がある、二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せば、そこに清水が湧いてゐる。齒につめたく沁みいるほどの強清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれることによつて、この唄の趣が深い。さうしてどこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖いが、山國の明るさは寒い。それがこれらの民謡の中にも現れてゐるのである。

(赤産全集)

八ヶ嶽  
信濃・甲斐の兩國に跨る高山  
最高峯赤嶽は高さ二八九九米

山路愛山

名は彌吉  
評論家  
静岡縣生  
大正六年歿  
年五十四

三 旅行

山路 愛山

風水相撃ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我の中に住むべきなり。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は、自然の光景に觸れて始めて感興湧出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れる歌人もありき。しかもこれ自然の神髓に達すべき道には非ず。自然は唯質問を發するものにのみ答辯を與へ、來りて見るものにのみ教訓を與ふるものなり。

試に千山萬水を跋渉し、而して後、首を回らして故郷を見よ。如

白河の關  
都をば霞と共に  
立ちしかど秋風  
ぞ吹く白河の關  
(能因法師)  
關の址は福島縣  
西白河郡古關村  
にある



昨日天邊の寸碧  
頼山陽の少年時  
代の詩  
雨過ギテ泉聲  
遠、喧シク、木  
落チテ山骨尤モ  
瘳セタリ。今朝  
杖底ノ千岩ハ、  
昨日天邊ノ寸碧  
ナリ。

何なる感情のこの間に生ずべきか。幼時より親昵せる某山某  
水は、始めて遙かなる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。  
心なくして飛ぶ雲も、夕日も、波濤も、人をして故郷を聯想せしむ  
る媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も、故郷の方の天とし  
いへば大いに詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して自然  
も亦その態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。  
今朝杖底の千岩は即ち明日亦天邊の寸碧なり。甕中に在る者  
は甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在り、始めて甕の全形  
を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺む  
る感興なり。  
我は嘗て蜻蜒を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき。溪  
流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。その岸に垂れたる

楊柳、その野に咲きたる杜鵑花、我は毫もその奇なるを感ぜざり  
き。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と  
境遇とを異にせる我は、始めて過去の位置と境遇とに在りし我  
を客觀的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みてしかも  
我に感興を與へざりし自然は、始めて我をして涙を零さしむる  
ものとなれり。これ、旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て最も  
味はひあるものに非ずや。

舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時若し夏  
の初ならば、杜鵑花、霧島、紅の雨を降らし、時もし秋ならば、兩岸の  
蘆荻、風に鳴る。時々刻々に變化する光景、人をして知らず覺え  
ず自然の吸引する所たらしむ。若しくは放翁のうたへる「山重  
り水複りて路無きを疑ふ。柳暗花明又一村」前面に儼々たる

放翁  
陸放翁  
名は游  
宋の詩人



桃源  
支那湖南省常德府武陵縣の西にあるといふ一仙境

山あり、舵師棹を暗中に揮ふ、前途既に窮するが如し、忽ちにして山廻り、天濶く、雞犬聲あり、田畝開け、桃源一村、人をして世界の靈明を歌はしむるものあり。この時この情景して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら、覺むるが如く、眠るが如く、有るが如く、無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のバナラマを樂しむが如き、如何に没風流の徒と雖も、終に黄金以外眞の娛樂あることを知るに至るべきなり。朝まだき旅立すれば、駒の歩に連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙後に颯き、清爽の氣身を襲ひ、殘月彼方の山の端にかゝり、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗とが地歩を争ふが如き、又微雨の蕭條たるに歴史ある古寺を訪へば、蝸牛壁に紋を畫がきて自ら多年風雨の侵蝕せるを示したる、若しくは夕陽に

夏草や  
松尾芭蕉の句

馬を下りて古英雄の廟を弔へば、

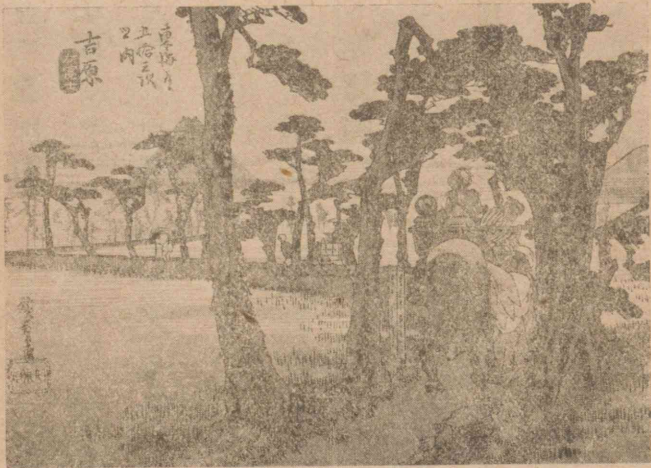
夏草やつはものどもが夢の跡

何とも名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、これ皆旅行ならては得べからざるものにあらずや。

羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より

一面の平湖鏡の如き浮島が原、その南を縫へる松林の東海道、總べてこれ一幅の畫圖なり。

春天穩かにして富士嵐到らず、空



東海道の松並木  
安藤の松並木

羽蟻  
與謝蕪村の句

浮島が原  
靜岡縣沼津市と同縣富士郡鈴川との間に於て浮島沼を抱く平原



氣は漣、瀾だになき水に似たり。忽ち見る羽蟻の飛ぶを。靜中  
纒かに動あり、駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。これ豈一室に坐  
して冥想する者の解し得る所ならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖つきて千  
五百米以上の高山に上り、而して下界を見よ。數箇の山脈は蛇  
の如く邑を圍み州を隔てて、營々たる人間恰も蟻垤の如くに見  
ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山川の配  
置自ら天命を示せり。乾坤大なりといへども、悟了すれば浮動  
の原素に過ぎず、原子と原子と相撃ち相觸れ、紛糾錯綜したる混  
沌の状態たるに過ぎず。劉は起りたり、項は亡びたり、シーザー  
は生れて死したり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡  
の山川と城郭と、漢々同一形。市人と鴉鵲と、浩浩同一聲」と歌へ

劉  
支那前漢の第一  
世

楚王項籍  
字は羽

シーザー  
羅馬の大政治家  
(西曆前100-前  
44)

雲雀よりも

雲雀より上にや  
すらふ峠かな  
(芭蕉)

天つ雲  
深三位入道賴政  
の歌

るは眞なり。故に山に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐す  
るものは即ち哲學の講壇に坐する者なり。

人は永久無限を慕ふ者なり。人のこの世に於ける境界は有限  
なり。然れども彼は無限の中に姪まれたる者なるが故に、無限  
はその欲望なり。雲雀よりも高き峠に息らひて身を雲の中の  
人となし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、  
無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山  
のあなたにも國あり、遙かなる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ雲一つに見ゆる越の海の浪をわけても歸るかりがね  
天青くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住むべき  
舎多きかな。人間豈塵界の爲に繩せらるべけんや。この意義  
に於て自然は人をして無限ならしむるものなり。これ旅行よ



り學び得たる自然の教訓に非ずや。

愛山文巻

三木露風

三三 斑鳩の宮

三木露風

名は様  
詩人  
明治二十二年(三  
西丸)兵庫縣生

斑鳩の宮  
法隆寺東院なる  
夢殿

上宮王  
聖德太子

やまとの國

上宮王の

いましし斑鳩の宮

青葉して、

夏はいま盛なり。

古きこの

あとどころ、

我は立ち、むかししのべば、

白き日のかざろひ照れる中に  
幻青し。

まだ稚き若草の文明日本に

吹きめぐる西域の薫は、

やはらかき詩の佛陀を

金色にたゞよはせぬ。

日出處の天子

日没處の天子に

書を致すと

かの太子は宣らす、おごそかに、國使をして。

日出處の天子  
日出處天子、致す  
書、日没處天子。

國使  
遣隋使小野妹子



覺弼  
高麗の僧  
慧慈  
高麗の僧  
聖徳太子の師  
推古天皇の三年  
(二五)來朝

覺弼や慧慈等の聖徒は  
衣を翻して來り、  
藝術興り、文明進み、  
憲法制定せられて、朝政革る。

羨しき法隆寺は

千三百餘年の昔に建ちけらし。

嗚呼、大いなる日本のこゝろを示す

僧伽藍摩。

僧伽藍摩  
僧伽  
僧會

見つゝ我が

涙をながす、

東天の菩薩太子、

君がせし功績のあとを。

やまとの國

上宮王の

いましし斑鳩の宮、

青葉して

夏はいま盛なり。(青き樹かげ)

二三 日本文化の優秀性

鹿子木員信

國風と民俗とを異にせる異國に發生した文化を吸收攝取する

鹿子木員信  
哲學者  
九州帝國大學教  
授  
明治十七年(三五)  
東京生



に當つては、我等は、先づ古き日本文化の崇高と優秀とに十分目  
 覺めなければならぬ。我等はともすれば、皮相低級な歐米崇拜  
 の濁流に浸されて、過ぎし日の日本文化の偉大を忘却し去りが  
 ちである。こゝに我等は、暫く足を停めて、獨得な日本文化とそ  
 の精神とを、我等の自覺の焦點に於て見ねばならぬ。

日本の藝術は、實に日本國民性の驚くべき高き氣品と深さと美  
 はしさとを物語るものである。藝術といふ範圍に於ては、或は  
 日本の文化は世界最高の文化とはいひ得ないとしても、少くと  
 も、たしかに世界最高の文化の一つであるとはいひ得るもので  
 ある。

余は決してヨーロッパの文化と藝術とに對して冷淡無關心な  
 ものではない。寧ろ、一面、ヨーロッパの文化と藝術とに對して

共鳴と愛着と尊敬とを禁じ得ないものである。が、それら總べ  
 てのヨーロッパの偉大な藝術を以てしても、なほ我等の心には、  
 依然満たされない或ものが残る。何であるか。それは深き心、  
 魂の奥底深く包まれた圓滿自足の心である。自ら以外、何等他  
 に求むるところなき心、自らの力と徳と美との美はしさを他に  
 誇示表現するをさへ蔑む心、否、この蔑む心をさへ脱却超越せる  
 心、この絶對的に内なる、内に満ち内に憩ふ内的世界こそ、ヨーロ  
 ッパの藝術に絶無といへないまでも、極めて稀なる魂の領域で  
 ある。この奥深き心、たとひ全世界は毀れ碎け焼け落ち去つて  
 も微動だにせぬ心、既に強さそのものを超越せる心の豊けさ、靜  
 けさ——この絶對に内なる世界の藝術的表現こそ、實に日本の  
 藝術に獨自の特色を附與するものである。その指すところは



パロック  
十七世紀の初に  
發達した建築様  
式  
ロココ  
十八世紀の初パ  
ロック式につい  
て佛國に起つた  
藝術様式



堂月三良奈 繪畫光月

常に深遠幽玄の内なる心、その内には、一撃にしてこの世界をも打碎くべき力を湛へ、しかもこれを外に向つて示すことなく、満を持して放たぬ力、その恐しきまでに強き力の上に坐して、しかも山湖のごとく靜かに動かぬ心、かくの如き心こそ、日本の藝術をして天下一品たらしむるところのものである。

世界何れの國にか、飛鳥奈良朝若しくは鎌倉時代に於ける我が佛像彫刻の如く、しかく深き神々しき宗教的精神をさながらに呼吸する彫刻があらう。若しくは、パロック、ロココの全作品を探しても、どこに我が室町時代以降漸

次盛になつたあの數奇幽雅な什寶を求め得よう。または、世界のあらゆる武庫を尋ねても、どこに現代まで傳はれる幾多の名工の鍛へた日本の刀、日本の鏢に匹敵するものがあらう。

次に日本の宗教について深くその姿を探つて見たい。

言ふまでもなく、日本の藝術は、その多くの原動力を、宗教特に佛敎に仰ぐものである。而して日本國民は極めて宗教的なる國民である。日本國民を以て宗教心に乏しきものと速斷する見解が無いではない。しかし、その永き歴史を顧みる時、日本國民は、何れの國民に比べても、決して宗教心に於て見劣りするものではない。否、我等の宗教心は、或方向に向つては極めて勁烈である。我が國民的宗教たる神社崇敬について見よ。いづれの文化國に、今日尙その本來固有の國民的宗教を保持し、主張し、こ



れをして暗黙の間に自國の守たらしめてゐる國家があらうか。あの日本の神々の精神を表現してゐる神社の建築を仰ぎ見よ、單純にしてしかも莊嚴、自然と頭が下るではないか。この日本の宗教的精神は、後代に至つて、佛教といふ偉大な柱にからんで育ち、その花を咲かせ、又その實を結んだものである。而してまことの日本の佛教は決して一つの宗派、一つの宗團の専有物としてでなく、寧ろ一般國民的生活に浸潤して、冥々のうちに國民の精神を陶冶する一大精神的感化力として生きてゐたのである。今日尙生きてゐるのである。少くとも或時代に於ては、我等の最も偉大なる國民的英雄の心膽氣魄のうちに、紅の血潮と躍つて大事を決行せしめる原動力であつたのである。

永祿三年五月十九日、今川義元は二萬に餘る大軍を率ゐて、潮の

永祿三年  
正親町天皇の御代(1110)

如く織田信長の清洲の城に迫つて來た。侍臣は皆、信長に籠城

防禦を勧めた。しかも信長は斷乎としてこれを斥け、先君の遺誠に従ふと言切つた。そしてその城を出て敵を境外に邀へ討たうと決意し、起つて、敦盛の舞を舞ひ終つて、主従僅かに六騎、清洲の城をとび出した。この時の光景を描いた祐筆太田牛一の「この時信長、敦盛の舞を遊ばし候。人間五十年、化天の内を比ぶれば夢幻の如くなり。一度生を得て、滅せぬ者の有るべきか」とて、法螺吹け、

清洲の城

愛知縣西春日井郡清洲にあつた織田信長の居城

化天

化樂天の略  
天上界の一  
こゝに生れるものは自ら五塵を化し自ら娛樂し壽八千歳に至るといふ



信長敦盛の舞を記  
繪本太閤の舞を記



具足よこせと仰せられ、御物具召され、立ちながら御食事を参り、御兜をめし候うて、御出陣なされ……といふ文章は、實に幽玄な形而上學的思想と、端的な英雄的斷行とが、經緯となつて輝く、世にも珍しきものといふべきである。

この敘述をして意味深長ならしむるものは、實に、二つの相異なる思想の綜合、しかも單なる概念の上に於ける綜合でなく、寧ろ生ける行爲の上に於ける綜合統一に存する。「人間五十年、化天の内を比ぶれば、夢幻の如くなり。一度生を得て滅せぬ者のあるべきか」とは、要するに諸行無常の理を諡へるもの、それは必ずしもやまところのみ特有のものではなく、寧ろ印度傳來の、東洋共通の思想である。否、諸行の無常と萬法の流轉とを説く者は、何も東洋の思想にのみ限りはしない。希臘の最も高貴な思

ヘラクレイトス  
ギリシャの哲學  
者  
（西曆前三頃—  
前四頃）

想家ヘラクレイトスの哲學は、實は萬法流轉を喝破せるものであつた。日本の精神を獨得なるものたらしめ、截然としてこれを爾餘一切の東洋厭世隱遁の思想より峻別せしめた例は、實に信長をして、あの桶狭間の危急存亡の秋に臨んで、法螺吹け、具足よこせと仰せられ、御物具めされ、立ちながら御食事を参り、御兜をめし候うて御出陣なされ……といふ英雄的果敢斷行の結論に導かしめたことに於て見られる。これが健闘を辭さない最高の精神である。「生者必滅、會者定離」の思想よりしては、未だ必ずしも直にこの英雄的行爲は生れて來ない。否、印度、支那の場合に於て、この思想の生むところは、寧ろ避難遁世の苟安の隱士、乃至は保身に巧なる所謂明哲の類である。然るに、我にあつては、この人生を夢幻と觀、我等の一生を蜉蝣の如くはかなきもの



と見る、その幽遠高踏脱俗の思想そのものより、立ちながら食事し、甲冑を帯して敵の千軍萬馬の眞唯中に突撃奮闘する乾坤一擲の英雄的斷行の泉を汲んで來てゐるのである。實にこの綜合の精神こそ、日本精神をして世界獨得のものたらしむるものである。

我が日本の文化にあつて、諸行無常の厭世超脱の思想は、單に山林の間に自適する出家沙門のものたるのみでなく、一般に國民精神の間に浸潤する思想であり、しかもその思想は、決して、往々シヤム・ビルマに見るが如き、國民的精神を優柔軟弱に導くが如きものと墮せず、寧ろ却つて高邁なる英雄的行爲の源となつてゐるのである。これまた我が英雄的行藏をして、往々歐米の偉人英雄に見るが如く、煩惱執着、飽くまで地を匍うて塵を吸ふの

シヤム  
暹羅(今は泰國と改稱)  
印度支那半島の中部にある一獨立國  
ビルマ  
緬甸  
印度支那半島の西部にある一地域  
英領

嫌なからしめ、常に高貴高邁の風あらしむる所以である。而してこの精神こそ實に我等が大乗的精神と稱するところのものである。概念的構成としての大乗佛敎はいさ知らず、眞の具體的に生くる大乘的精神は、實に獨得に、日本精神の産むところであつたのである。我等はこの高邁なる精神を、最も善く三浦道寸の最期と、その辭世とに見ることができる。三浦道寸、北條早雲と戦ひ、その最後の據りどころ三浦三崎の油壺の海城にたてこもり、力戦苦闘、矢盡き刀折れて、遂にその老の皺腹を搔切るに當り、彼は心靜かに歌つた――



三浦道寸の最期  
北條早雲代記

三浦道寸  
相模國三浦の大名家  
北條早雲  
小田原北條氏の初代  
名は長氏  
通稱伊勢新九郎  
永正十六年(一三七七)卒  
年八十八



討つものも討たるゝものもかはらけよくだけて後はもとの  
土くれ

敵も味方も、討つ者も討たるゝ者も、元來一味一様の、隔てなきものであるならば、しかく敵味方に偏執して力戦苦闘するの要はなかつたかも知れぬ。しかも日本のつはものは、この認識の上、尙その幻の世に生くる限り、悪戦苦闘を辭さないのである。しかも同時に、その心の奥底に、敵味方の差別と特殊と流轉とに超越せる一味平等の絶對者に參じて、劍戟の響のうち、鮮血流るゝ敗戦の裡に、親族郎黨の討たるゝ一族没落の日に、尙あの油壺の水の清らかに澄めるが如く、またあの岬角に聳ゆる老松の清韻の如く、よく超邁清爽なることを得たのである。

我が日本の獨得なる精神は、唐天竺から渡來した佛教によつて

法然

淨土宗の開祖

名は源空

美作(岡山縣)の人

建曆二年(一一七二)

寂

年八十

親鸞

淨土眞宗の開祖

京都の人

弘長二年(一一三二)

寂

年九十

榮西

臨濟宗の開祖

備中(岡山縣)の人

建保三年(一一七一)

寂

年七十五

道元

曹洞宗の開祖

京都の人

建長五年(一一三三)

寂

年五十四

日蓮

日蓮宗の開祖

安房(千葉縣)の人

世界何れの國に、十分に藝術的價値を體現して、しかもその大

はぐくまれ、しかも同時にその佛教を大乘佛教、否我等の魂の血肉のうち生きる大乘的精神にまで陶冶し得たのである。我が鎌倉時代に、法然親鸞榮西道元日蓮の出でたのは、決して偶然では無い。而してこの優美にして雄健、雄健にして幽玄なる精神は、同時にまた世界的に高貴な文學を生んでゐる。源氏物語の洗煉された典雅、巧緻な文學、平家物語の驚くべき深き宗教的、形而上學的背景を持つ悲壯、凄艶な史詩、日蓮の遒勁無比な豫言者的文字等は、世界におけるこの種の文學の何れに比べても遜色なきものである。

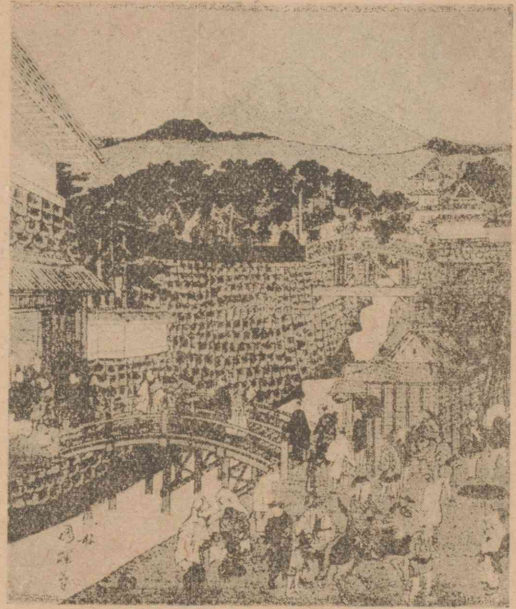
世間往々日本の藝術作品を評して、繊細巧緻の小品となすものがある。いかにもそれが無いではない。しかし思うても見よ、



弘安五年（一九三）  
寂  
年六十一

運慶

鎌倉佛師の祖  
從鳥羽・順徳兩  
天皇の頃の人  
ミカエランゼロ  
伊太利の彫刻家  
・畫家・建築家  
（西曆一四五一—一五〇〇）



江戸川國輝城

の、奈良の大佛に及ぶものがあらう。今日現存せるものは大佛殿も大佛の頭部も奈良朝當時のものではない、しかも尙、これを仰ぎ瞻る時、我等はその偉大なる藝術の美に打たれざるを得ないではないか。若しくはまたかの平安朝末期鎌倉初期の生んだ力強い運慶の作品を記憶にのぼせて見よ、余はその力に於て、またその大いさに於て、ミカエランゼロに劣る所を見ない。徳川時代の初期に出来た江戸城を見よ、かほどまでに雄大、かほ

どまでに大規模な城郭は、世界中を探しても、恐らくまたとないであらう。

余は、こゝに、これ以上、日本文化の高貴と偉大とに深入りする暇を持たぬ。余が日本文化の種々相とその特色とを語つた所以は、實に讀者自ら立留つて、暫くその祖先健闘の跡を追懐し、日本文化の實に天下一品なる事實を、その胸裏に牢記せられんことを冀ふに外ならぬ。

約七十年前、我等日本國民が、始めて類を異にする西洋文化に面接したのは、實にかくの如き天下一品の文化、或方向に於ては殆ど完全の域に達せる文化を掲げてであつた。然るに西洋文化に面接するや否や、我等は、在來の儘では日本國の存在を完うし得ざるを認識しないで居られなかつた。かくしてこゝに單



Divina Comedia 神曲 Dante (1265-1324) ダンテ 伊太利の大詩人

なる「存在」のための高貴なる文化の變革「精神的文化」の「物質化」は始る。これをしも悲劇といはずして、何をか悲劇といはう。それは實に「物質」の祭壇への「精神」の犠牲である。しかし力強きやまと心は、この物質の犠牲を通して、今や方に、より力強き精神の更生期に進みつゝある。日本精神は、今や再び大死一番大悟徹底を経験せんとしつゝある。要するに我等の悲劇は唯悲劇に終るものでない。それは實にダンテの意味における神曲である。

(やまとこゝろと獨逸精神)

中國文教科書 第七終

(略名) 吉田國語

昭和昭和昭和昭和昭和  
和和和和和和  
十十十十十十  
六六六六六六  
年年年年年年  
二二二二二二  
八八八八八八  
月月月月月月  
十十十十十十  
七四七四七四  
日日日日日日  
訂訂訂訂訂訂  
正正正正正正  
三三三三三三  
版版版版版版  
發發發發發發  
行行行行行行

中國文教科書 全十冊  
定價各金六拾錢



著者 吉田 彌 平  
補訂者 石 井 庄 司  
發行者 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
中等學校教科書株式會社  
代表者 山本 慶 治  
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
大日本印刷株式會社  
石 村 勳

發行所

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
中等學校教科書株式會社  
日本出版文化協會會員番號 一二七五二二

配給元 日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡路町二ノ九





四ノ四

津江本

広島大学図書  
2000052428  
